

J2.99:15

15 of 20

Apr. 1945
Vol. 3, no. 4

67/14
C

ポス ト
文 藝

四月号



ポストン文藝四月號 目次

表紙(春和む)
寫真(高原の春)

卷頭言

青少年の犯罪に就て
庭球の思ひ出
塩湖市會議隨行記

鐘の音
ユトリある人々
茶漬の味
辭林

健康法
ポストン生活印象
寶石の話
吟詩漫筆

春土を起す朝
口笛
鴨・如月日記
過失

詩と俳句
生活断章
水温む頃
短詩二章
ポピイの會
春雜詠三人抄
滿座那吟社抄

短歌
如月歌會詠草集
選後隨錄
初步添削講座
句會并互選

創作

街上行水
家鴨の生血
森林

編輯後記

カット
原板

久留島實雄
小坂芳雄

有田百

芳川積三

松原信雄

翠川敏

芳竹道人

圓鏡寺

外川明

伊藤四郎

貴家表子

新関惣太郎

大岡周洋

外川明

牧さゆり

木内春波

青木伸

片井溪巖子

鴫子

野田貴一

永瀬勇

島原潮風

酒井知巳

羽根政春

谷川江浦草

進藤舟水

瀧井謹平

106 97 91 89 85 81 78 70 79 69 66 64 64 62 60 58 56 2 53 48 43 40 37 34 31 25 15 7 3 1



吉原の春

卷 頭 言

一國の興亡も量り知れぬ時に 何故急がねばならぬか個人の成功。

人類の総てが各自母國へ命を捧げて戦つてゐる時代ではないか、この集團生活の爲に存給を忘れて働くことは当然の義務だ。

完全に生きると云ふことは 死に生きることだ。

自我を殺して見よ いくらでも公共の爲に働けるやうになつて来る。

頭上には 常に無限の天空だ。

鉄柵の束縛は最初から感じもせず 今の開放にも大した感激はない。

委せき水 まかせき水 一切を偉大な力にまかせてしまつたら、明日への不安も憂愁も消えてしまふのだ。

人間は一人では生きられない たい一種族の爲の地球でもない。

その解りきつたことを人類の総てが再認識した時だ平和の来るのは。

この地球の大変難時に たい自分だけ生きやうと悶悩する愚かさよ。

春を起す朝

ホロー ホロー ホロー

庭に下りて来た六羽の鳩が次第に近づいて来る

その中の一羽が ふと立止つて不審さうに首を傾げる

鳩の足は芍薬の新芽のやうにピンク色をしてゐた

地べたに体を洗つてわうび寄る鳩の眼の金色の輝き

だが猫の首の鈴が音を立てるより先に

ワウ ワウ ワウと 大きな声を立てながら

両手を攀げてその中に躍り込んだ三才のP坊

鳩はパタ／＼と羽はたきながら屋根桝に舞上つた

空からは藍翠の滴がこぼれて来るやうな気がした

東の叢山を痛れたばかりの太陽は鳩の胸々を赤く染めた

今日抱えて 明日去つたかうしていいぢやないかね

春の土を起すことが楽しみなんだよ

通りがかりの友にかう語りかけながら

彼は杖にしてゐた鶴嘴を笑顔と共に高く振りかざした

カツトンツリーが一齊に芽を吹き出した弥生の朝。

外川 明

青少年の犯罪に就て

有田 百

二月五日、クリーブランド市にて發行せる、シニヤー・スカラスティック誌は、青少年犯罪に付、有識男女青年の研究會記事を公表した。之を讀む時、決して他山の石として眺むべきでない。一事々々を吟味する時、子弟の教育及び指導の上に、考へさせらるゝ所が多いので以下之を摘記する。

「將來國家の柱石たるべき青少年男女の犯罪の激増が、現在の國內問題中、第一の重大問題である。」と呼びかけてゐる。

△カイ嬢が郡社會課で娘達の會話を立聞さした事の報告に「私はホツケイを遊ぶので家を飛び出す。學校などつまらぬ事を教えるから嫌いだ。家の仕事、血洗ひ、そして母が工場に働いてゐる間の赤坊の子守も厭だ。私は再び逃げ出すだらう。我等青年は我々自身の欲する生活をする權利を持つてゐる。」

△マアーテル嬢の報告「我が郡には過去三年間に驚くべき犯罪が激増した。最も悪質なロバート（十六歳）とヘンリー（十七歳）は共に四十回も泥棒をし、又、四個所の學校に放火した。」

△ステーブ君の報告「十六歳以下の少年が、法律違反の行爲を平氣で行ふ。ポケットに一杯お金を入れてゐて、好ましからぬ所で其の金を撒き散してゐる。そして更に好ましからぬ方向に進んで行く。學校には行かぬ。勉強は無論怠るのである。」

△キヤスリン嬢の報告「女子の犯罪最高記録地は、加州サンデーボーで昨年度の増加率は、男子青年五十パーセント。女子青年は實に三百五十パーセントである。」

△ロバート君の報告「汽車のステーション又はバスの停留所には、十五六歳位の娘が、兵士を誘ふのを多數見受けない事はない。此等をカーキワツキース、又はヴィクトリ！ガールスと呼んでゐる。」

次に犯罪の原因について掲げてゐる。

△實際米國の娘は余りに自由過ぎる。奔放の生活である。

△然るべき指導者なき爲めである。父は戦争に出てゐる。既に全米家族の二十五パーセントは兵士を出してゐる。故に家族團欒の親しみなき爲めである。

△母親が工場に働き、子女の監督なきためである。

△母親の監督については面白い實證が擧げられた。それはニュージャージー州のネワークの教育局が試みた子供犯罪と母親との關係についてであつた。黒人の母親千五百人を彼等の子供と一緒に生活させた所が、驚くべし、直ちに児童

犯罪率二十九パセントの減少を來したのであつた。

然らば、如何にして彼等を善導し、對處すべきかに付列擧してゐる所に依ると、
△家庭の和樂と母親の監督。

△宗教教育——萬四千の犯罪者の三分の一は何等宗教的素養がなかつた。

△兩親を尊重せしむること。

△法律を遵奉せしむること。

以上が誌上より拔萃したのであるが、次に新聞の報道を紹介しやう。

△FBIのフーバー長官は、少年犯罪防止案を樹て全國的に之を實施すべき事を強調した。そして四十三年度の男子は十八歳、女子は十九歳が最も多い犯罪年齢だつたと發表した。而も四十二年度よりも八十九パセントも増加した。特に少女の性犯罪が増したと附加した。

△昨年の十月二十九日東京ロンドン發電。ロンドン教育委員會の發表に依ると、少年の泥棒が少年裁判所で扱ふ犯罪の六十パセントを占めてゐる。五人の内三人迄が泥棒である。大抵家を打ち破つて盗むのである。数年前犯罪者の五十パセントに對し刑の執行猶豫をせられたもので、一ヶ年内に再犯するもの、統計は、五八二人は六ヶ月以内に、二六七人は三ヶ月より五ヶ月以内に、又二六一人は二ヶ月以内に、五四人は一ヶ月以内に再犯した。十六歳の娘は衣物店を破つて二百二十五弗の物を盗んだ。『綺麗に見へ度い』と云ふ慾望から盗んだ

と告白した。

△我が社會から例令ば、惡童、不良少年が出たとして、之に對する處罰、改心の効果的方法を研究する必要がある。児童に「自分は罪惡を犯した。烙印付だ。何だか世間の人も、自分をさう何時までも眺めてゐるのだ。」と云ふ偏見を持たせたならば卑屈となる。惡童であることを自認すると、段々と罪惡に對して大膽となつて、大抵再犯するに到るであらう。それには社會も一部の責任を負はねばならぬ。故になるだけ法律的犯罪者としてこの烙印を押さず、「惡」に對する自省を求めて改心を促すが良い。それには傳統的に日本人は「恥」に對しては頗る敏感であるから、必ず兩親の出席を乞ふて、青少年の行爲が恥づべきことであり、親としても世間に顔出しがならぬぞ、と言ふ様にして、温情に富んだ、そして熱意のある説諭をしたなら、頗る有効的であると思ふ。無論其の場合は對學童であるなら、校長及び受持教師立會の上でなくてはならぬ。法廷の場合は權威を示す上に於て、關係者の威容を整へ、且つ青少年の尊敬する人物を選ぶべきであらう。

實に青少年は來るべき時代の柱石である。児童の教育には社會人全体が細心の注意を以て自らの言行を慎み、範を垂れ、實踐躬行、身を以て善導すべきである。



庭球の思ひ出

芳川 績三

ポストン文藝編輯子からテニスに就て何か書けとの、数度のきつい催促黙し難く遂にペンを走らすことになりましたが、聊か自慢話になる嫌ひがありますから、どうか其のお積りで讀んで戴き度い。

私のテニス生活は他の同胞テニスプレーヤーの方々に比較して、割合に長命でありました。此の長いテニス生活の間に、幾多の思ひ出深いものが織り込まれて居ります。其の中の未だに腦裡に深く染み込んで忘れられない場面の一、ニを摘出して、拙文に綴つて見ませう。

私は曾てジュニア時代、桑港の對岸バークレー・テニス倶楽部のコートに於て、米國庭球聯盟後援、加州庭球協會主催の下に舉行された太平洋沿岸シングルス選手権試合大會に、数百の同胞プレーヤーの中から特に選拔されて出場しました。此の大會は其の當時太平洋沿岸で最も華々しい試合で、加州各地の選手は勿論、ポートランド、シヤトル、バンクーバー、ソートレーキ・シティ、フィニックス、其の他の地方から多数の名選手が参加したものであります。

試合の経過は略しますが、私は第一回戦から悪戦苦闘の連続でありましたが、兎も角連勝して決勝戦まで漕ぎ着けた時は、天にも昇る心地が致しました。愈々最後の優勝戦で剣戟相撃して火花を散らし、接戦また接戦二時間余り、遂に強敵の首級を撥つ切り、幸運の女神の抱擁を受け、群る大衆の前で榮ある米國庭球聯盟提供の大銀杯を授與され、各地英字新聞寫真班の前に優勝カップを抱いて立った時は、目頭が熱くなり全身が打ち震へました。私の優勝した事が逸早く傳へられるや、遠近の同胞の皆様から祝電に次ぐ祝電を戴きましたのも、忘れられない一つであります。

其の年の暮、米國庭球聯盟が公式に發表した全米庭球選手番附に、第一位は有名なビンセント・リチャード氏、第二位はジョン・ヘネッシー氏、第三位に私の名前が載せてあるのを見ました時、私は自分の目を疑ひました。其の上、當時世界一と謳はれ、不世出の庭球王と稱へられたビル・チルデン氏が、極力私の事を褒めた記事が番附批評面に出て居りました。猶同年のシーニヤの選手番附では、日本庭球を世界的にした熊谷市彌氏が、チルデン氏、ジョンストン氏に次いで第三位に置かれてありました。

其れから十数年後、確に千九百三十四年七月でした。私は商用で家族同伴。パナマ國へ出張し、パナマ市に滞在して居りました。その當時は兎角健康が余り勝れませんでした。其れから二ヶ月後、盲腸炎でパナマ病院で切開手術を受け

三週間程病院生活を送りました。其の上日々の仕事の方が非常に忙がしくて、好きなテニスも殆んどやるチャンスが無かつた所へ、翌年の二月、同國中行事の一つで、國際的の全パナマ庭球選手權大會出場の勧誘を受けました。一時は体好く断りましたが、再三再四の熱心な勧誘に根負けして、遂に出場する事を約束しました。

御存知の如くパナマ國は赤道直下に近くありまして、雨期が長く、大變に蒸し暑くて、日中は余り住みよい處ではありません。然し正月から四月にかけての四ヶ月間は乾燥期で、氣温も程よく下がり、此のシーズンは最も凌ぎ好いのであります。従つて野外運動競技が最も盛んに行はれます。野球は米國の野球聯盟のAクラスに相當する可なり強いチームが五、六組あつて、毎日曜日には立派なグラウンドでリーグ戦が催され、ファンの血を沸かせます。

庭球は年中やつて居りますが、矢張り此の乾燥期が一番盛んなのは當然でせう。此の季節には方々のテニス俱樂部で、庭球試合が度々行はれます。一般にコンクリートコートで硬球を使用して居ります。

米國の勢力範圍にあるキヤナル・ゾーン（運河地帯）は、米國から派遣された役人、技術家、軍人等の住宅地であつたが、それ等の人々の家族の中には曾ては名を馳せた名選手も澤山居り、又世界各國の銀行、會社の支店、出張所、領事館、貿易幹旋所と云つた様な所には、勤務の都合上現役大選手が来て居りました。ですから、毎年一回舉行されるパナマ國庭球協會主催の全パナマ庭球選手權大會は國

際のもの、恰もあのデイヴィス・カップ爭奪戦に彷彿するものがあります。

それで私が愈々此の大會に出場する事と定つた時は、今年は今まで曾てない日本人の参加を申込んだと云ふニュースに、何處から引つ張り出したものか、バークレーの記録に寫真入りで、大々的に報導したものですから、彌が上にも人氣を煽り立て、女房を質に入れても此の試合は見逃すものかと、大變な人氣でありました。其の人氣の焦點になつて居る日本人は一体どんな面構へをしてゐるか見てやれ、と云ふ物好きも出て来て、他に別段用もないのに態々私のオフィスに立寄つて、無駄話をして行く人もありました。

當時パナマ市内には二百人ばかりの同胞が居りましたが、擧つて力瘤を入れて、どうかしつかりやつて日本人の意氣を彼等外國人に示してやつて呉れと、激辱して下さつたのには大いに感激させられました。

一方斯んな話もありました。芳川が如何に其の昔加州の庭球界を風靡した事があったにせよ、あれからは年月も大分経つて居るし、昔程の元氣も無からう。それに第一肝心の練習を長い間して居らない事だから到底榮冠は望めないが、せめて惨敗を喫しなればいゝかと、蔭ながら心配して居つた人も多かつたこの事、後日知人から聞かされました。

愈々試合開始當日は豫想以上の見物人で場外まで溢れ、日本人も多數来て居り、其の中にパナマ駐在日本領事の顔も見えまして、固唾を飲んで見詰めて居られます。私は是れをチラッと見ました時は、何かしら熱いものがグツと胸に

込み上げて来て、身體中がシヤンとして、石に齧り附いても勝たねばならないと思ひました。又同じ負けるにしてもあの櫻の花の散る如く、綺麗に、男らしく、日本人の持つスポーツ精神を極度に示してやらうと決心しました。

本大會は從來にない出場者が非常に多かつた爲め、各出場選手は第一回戦から最終戦まで、毎日一試合づつやるスケデュールになつて居りました。

忘れもしないそれは二月十五日、空に一片の雲なく、熱帯の太陽は燦々と輝く下に、戦の幕は切つて落された。第一、第二、第三回、右と左に敵をば切り捨て、三戦三勝の下に驀地に第四回戦へ進めば、パナマ共和國第一人者と謳はれ、全國の輿望を背負つて立つ強敵と對峙した。敵もさる者、正確に球を打ち返し、稀に見る粘り強い老練家、私も相當に惱まされたが、私の此處を先途と打つバックハンドドライブが利いて、ハ一六、六一四で遂に敵を仆し、息も接ぐ間なく第五回戦に突入すれば、颯爽たる若武者、これなん最近まで米國東部某大學庭球部の主將を勤めた剛の者、新に運河地帯勤務として来り、榮冠獲得の有力な候補者。何を小癪な日本人とばかり、素晴しいスマッシングとヴォレーの秘手の連發、始めは私も敵の球勢に壓せられ、たじ／＼となつて危く土俵際まで追ひ詰められたが、敵が比較的バックが弱いのを發見し、猛烈に此處に攻撃を集めた。狙ひ違はず遂に三一六、七一五、六一三で敵を切り伏せ、鯨れる大刀ならぬラケットを提げ、勇氣凜々として愈々晴れの決勝戦に入りました。

大會始まつて連日満員の大入りでしたが、殊に此の日は東側スタンドにパナマ

在住の全日本人が應援に来て呉れたのは、感激の至りでありました。南側の特別席には、キヤナル・ゾーンの高官、パナマ國の上役人、連日顔を見せる日本領事、市民のリーダー格の人々が詰めかけて立錫の餘地も無い程でありました。當日私は早朝より何時になく風氣味で、午後の大事な試合を氣遣ひしましたが、幸ひ晝頃にはすっかりよくなりました。

決戦前の一般の豫想では、私の決勝戦の相手は中歐のある汽船會社のパナマ出張員で、数年に亘る同國のデイヴィス・カップ選手で、決勝戦まで鎧袖一觸に群る敵を屠つて来て居る故、私との勝負は全然問題でなく、單に芳川がどの程度までに彼に食ひ下るか、興味の中心になつて居つたとの事でありました。相手は六尺豊の百七八十斤もあらうと云ふ、見るから均奇のとれた三十前後の偉丈夫でありました。それに引換へて私は日本人でも小柄の五呎一寸そこそこ、目方百二十斤足らずの貧弱な體格であつたのですから、コートに二人が並んだ時はまるでポンチ繪そのまゝであつたらうと思ひます。

臆て主審の一聲高くレディー——プレイと共に最終戦の火蓋は切つて落されました。

第一セツト

劈頭より敢然攻勢を採つた私は、續け様に敵のベースライン深く猛ドライブを打ち込んで、敵に前進する機會を與へず六—三で先づ敵の出鼻を挫いた。

第二セツト

敵もさるもの、最も得意とするアメリカンサーブで猛然と攻撃に出で、軽妙なグオレーと相俟つて着々得點に得點を重ね、六―二で易々と敵の復讐はなつた。

第三セツト

敵は同一策戦で勢鋭く攻め立て来り、瞬く間に五―一でリードして優勢を示した。此の時までどうしたものか余り効果的でなかつた私の主な攻防武器、バックハンドドライブは俄然當り出し、特にサイドラインに沿ふ奇襲は少からず敵を悩まし、激戦四十五分の後、九―七で私の逆襲なつた時、觀衆の拍手は暫時晴れ渡つた中空に研して止まなかつた。

第四セツト

老巧な敵は私がチヨツプに脆い事を見破り、盛んに是を利用して私を散々に苦しめた。既に一時間半近くの戦に私は漸く疲労を感じて来た。何糞！今此處で屈服して堪るものかと力戦大いにこれ努めたが、敵は悠々と好調を續けたので及ばず、六―四で又も私は敗退した。


第五セツト

決戦最後のセツトである。慧眼なる敵は機を見るに敏、果然此處を先途と猛攻し来り、私は敵に強壓せられ防戦の一途、瞬時に四―〇とリードされ、形勢非常に不利に陥つた。此の時同胞の觀衆にちらりと目を遣れば、日本人の名譽の爲め、「頑張れ、頑張つて呉れよ。」と言ひたげに私の動作をじつと見守つて居る。おう、さうだ！今日の試合には自分はどうしても負けられぬ大事な試合なのだ。倒れる迄頑張らう、と思ふとふつ／＼と全身の血が沸つて来た。俄然今まで思はしくなかつた私のネットプレイが冴

え初めて来た。敵は虚を衝かれて焦り出し、易々なボールをミスし始め、ダブルフォルトは度重なり、スマツシングの威力はぐつと減退した。敵は浮足立つたるぐ此の機を逸してなるものかと、私は有らゆる秘策を盡して攻め立て、四一四と盛り返し、更に追撃して五一四とリードすれば、観衆は總立となつてやんやぐと囃し立てる。後僅か一ゲームを奪へば名誉ある優勝者になれるのだ。私は必勝の自信を胸にしつかり抱いた。愈々忘れられぬ第十回目のゲームに進み、敵のハイパウンドのセカンドサーヴを全身の力を込めて、敵陣のコナー深く發止と打ち込んだ瞬間、私の左の足にっーんと急激な疼痛が襲つて来た。あつ！ クランプだ！ やんぬるかな、運動家が競技最中に最も恐れるクランプ、萬事休す。勝利の女神は私を見捨てた。然し私は手負の儘劇痛を堪えスポーツマンの執るべき道を驀地に突き進み、最後のポイント迄戦ひぬき、刀折れ、矢盡きて、七一五で遂に敵をして名を成さしめた。此の決勝戦たるや、實に三一六、六一二、七一五、六一四、七一五、二時間半に亘る文字通りの大白熱戦。噫、私の大望は遂に成らず空しく長蛇を逸した。

戦後私が最も嬉しかつた事は、私が最後にクランプで跛を引き、齒を喰ひ緊つて戦つた態度が全パナマ人を極度に感激させ、それが爲同國人の日本人觀がうつと變つたと言つて、在留同胞の皆様から望外の讃辭を受けた事であります。私は今でもテニスコートが目に入る毎に、何時もあのパナマでの激戦の日の追憶に耽るのであります。

(終)



塩湖市會議隨行記

松原信雄

出發

二月十四日午後七時、「しつかり!」「元氣で。」と態々見送つてくれた人々——
角田行政長、西本部落長監督、鈴木参事會副議長、ポストン新報の石丸兄、正
木翁其他の人々の御言葉と堅き握手に勵まされて、我々一行加藤、岡本、久
保田三代表と私の四名は車上の人となる。(軍部から加州立入を禁止されてゐる
高嶋君は、その朝既に出發してゐた。)

「パ・パ・ア!」我子の高い呼聲に驚かされて窓外を覗いたが、薄闇の中にその
姿が見出せない。暫しの別離だと思ひ乍らも、胸には熱いものがこみ上げて来
るのであつた。

鹽てバスは動き出した。三年振で始めて「娑婆」に出て行く僕の胸中をさま
ざまな感情が去來する。

七時十分、憲兵^{M.P. ステーション}派出所に着く。憲兵が乗車して我々の出所許可證を調べ、十
五分過ぎ再びバスは走る。

七時十五分パーカーに着く。夕闇の中に見るパーカーは百姓の老婆の容貌を

聯想させる。ラス・ベীগス行バスの切符を求めて入ったレストランの掲示「バスターがありませんから、代用品又コアで」といふのが僕の眼を射る。バスを待つ間、我々日系人を排斥する例の床屋に憐愍の一瞥を投げる。

八時前、フィックスよりのバス到着。乗客は多すぎたが、次のバスは数時間後でなければ来ないといふので、止むを得ず乗車してスーツケースの上に腰を下す。八時三十五分出發。バスがコロラド河を越えると、左方遙か彼方に三群の灯が瞬いてゐるのが見える。それは我等の安住地ポストンなのだ。再び僕は感傷の虜となる。バスは山道を迂回しつゝ走る。ポストンの灯が次第に遠くなり、九時すぎバスが方向を右に轉ずると同時に見えなくなつてしまつた。

九時四十分、加州ニードルス着。人々と共にコーヒー店に入ると、カウンタ―に二十人ばかりの白人が並んで居る。僕等もその中に加はつて、一杯のコーヒーに身體を温め、街に出ると白人達が歩んでゐる。過去三年間殆んど日系人ばかりの社會に住んできた僕には、白人ばかりの社會が異様に感じられる。

十時、ニードルスを出發。バスは再び山道を走つて十二時卅分、(ポストン時間十一時三十分)ネバダ州の一寒村サーケライトに着く。店に入るとウイスキーとビアーがずらりと整列して、上戸黨の僕等を招く。冷たいアクミビヤーは恋人の甘美な接吻の味がする。すっかり睡魔を撃退した僕等は、「うまいね。」を連發し乍ら又も車上の人となる。

明けて十五日午前二時。五分、バスの終點ラス・ベীগスに着く。停車場内に手荷物を預けて汽車を待つ間、ネオン・ライトが明滅する夜の町を見物する。賭

博が公認されてゐるネバダの町ラスベীগスは、酒と女と賭博の歡樂境である。世の紳士淑女達は、その表看板を一時他に預けて、眞裸の人間となる別天地なのだ。「リノで離婚して、ラスベীগスで結婚する。」と言はれてゐる此處は、別れるにも、結婚するにも、スピードを要望する米國の代表的州ネバダの代表的タウンなのだから、「自由恋愛」實行者の天國といつてよいだらう。だが、この山奥の別天地、然も賭博場にすら軍人の照影が恭しく掲げられて、流石戦時である事を思はせる。

停車場へ歸ると、油に汚れたオーバーオールを纏つた女轉轍手二人がランタンを持つて場内へ入つて来た。戦争は男性に代つて女性をその職場に召集してゐるのであらう。

「お氣毒乍ら巻煙草はありません。」停車場内にある賣店の掲示は愛煙家の眼に痛い。其處で繪端書を求めて短信を認める。

五時すぎ、世名ばかりの兵士達と共に汽車に乘る。五時廿五分出發。あたりが明るくなるのを待つて窓外に眼を放つと、汽車は山道を徐行してゐる。目に入るものは唯セーデブラッシばかりで、誠に殺風景な山岳地帯だ。

「君、昨夜面白い事があつてね。」と同席の男が僕に語り出した。三十二三に見える白人である。「あの前のシートに居た男が、ポケットからウイスキー瓶を出してさも甘さうに飲んでゐた造はよかつたがね、暫くするうちに奴っ子さん誰彼なしに暴言を吹つかける。誰も相手にしないのをよい事にして、今度は喧嘩を買はうとして暴れ出したんだ、ね君。」と向側の一兵士に同意を求めた。

「さうだ、奴が僕の傍へでも来たら殴り倒してやらうと待構えてゐたんだが誰が報したのか車掌がやつて来て、汽車を停めると早速奴を闇の中へ突き出してしまつたね、本當に痛快だつたね。」と兵士は笑ひながら結末を物語つた。

「一本吸ひ給へ」兵士から差出された巻煙草をくわへ乍ら再び窓外を見ると、汽車は依然として螺旋形の山道を攀ぢ登つてゐた。長い列車を引く二輛の機関車が黒煙を吐き乍ら、喘ぎ喘ぎ頑張つてゐるのが見える。山には唯一本の木すら生えてゐない。行けども行けども山また山だ。後方の同行はと振り返つて見ると、加藤、岡本、久保田の三氏共眠つてゐるやうだ。

「どうもこの汽車はのろいね。こんな調子では僕は期日迄にニューヨークに着けないかも知れない。」と男が心配さうに呟くので、その譯を訊くと、彼は徴兵検査を受けるため、加州に妻子を残して行くのだとのこと。

遙か彼方の山腹に白いものが見える。汽車が進行するに従つてそれが雪である事が判つた。

「君、雪だよ、見給へ！」

「お、雪だね、美しいなあ！」スピード時代に逆行したのろい汽車と、殺風景な窓外にあき／＼してゐた僕等はまるで子供のやうに感嘆の叫びを擧げた。泥黒い山肌も雪化粧されると目も覺めるばかりに美しく、陽光がキラ／＼と躍つて僕等の旅情を慰めてくれる。

幾年振りで見る積雪！僕の心は雪投げに興じた少年時代の昔に還つてゆく。噫、再び還らぬ少年時代よ！

馳て汽車はロツキー山脈を越え、平原に出ると快速度で走り出した。廣野の牧場には牛の一群が無心さうに雑草を食んでゐる。その暢氣さうな泰然自若とした態度よ！彼等は何か夢を見てゐるであらうか？ふつとそんな考へが浮んでくる。草を食めばそれで足りる牛よ、限りなき欲望の虜となつて同類相食する人間の世界を知ること勿れ！

正午、ミルフォード驛に着く。コーヒを飲まうと下車してカフェーに入ると、
「松原君、もう汽車が出るらしいよ。」と折角出されたコーヒに一寸口を附けたさう、岡本氏は駆け出した。僕は尚も待つてコーヒを飲んだために、あやふく置いてきぼりを喰ふ處であつた。

汽車は平野を走り續けて午後五時卅五分、我等が待望のソートレーキが視野に現はれた。美しい水を湛えた湖の上に夕暮近き陽が輝いてゐる。
六時卅五分、我等の列車「挑戦者」はソートレーキ市驛に滑り込んだ。

「では御元氣で。」と同席の友に別れを告げて下車す。

ヤロー・カブでホテルへ走り乍ら僕は貪るやうに街の風景を見る。煤煙にすゝけたビルデング、葉が落ち盡してうら淋しい街路樹、黄昏の空を這ひ廻る煤煙寒さうにオーバーコートに包まれて街頭を往く人々、僕の眼に映じたソートレーキ市は、生活苦に疲れ果てた貪しい老人の姿だ。ソートレーキ市民よ、僕の第一印象に憤慨する勿れ。

ホテルに着くと早速、波々と温湯を湛えた湯槽に身體を横たえて旅の疲れを洗ひ落した。湯槽に浸るのも三年振だ。前夜は車に揺られて一睡も出来なかつ

たので、早速ベッドに入る。

會議

翌六日朝、目が覺めてホテルの窓から屋外を見ると、白雪を戴いた高峰の彼方から、赫々たる白光と共にオレンヂ色の太陽が躍り出してくるではないか！そして、その前景に浮彫の如くソートレーキ市廳が旭光に輝いて聳えてゐる。昨夜の悪い第一印象は之ですつとんでしまつた。美しい朝だ。だが、この美しい風景に見惚れてゐる暇もなく、昨夜認めた通信を急ぎ投函して、道案内のため待つてゐてくれた高嶋君に従つて、今日の會議所であるYWCAへと道を急いだ。田舎者の僕等は方向を間違へたり、十字街のシグナルを失念してゐてまごついたりして、會場へ着いた時既に會議は開かれてゐた。

爾來廿五日夜半に到る十日間、(十八日の日曜日を除き)七センター七萬同胞の代表者三十名の間には、熱烈火を吐く討議が續行されたのであつた。特に各センター提出案の整理や決議文起草及びその翻譯の際などは、各委員徹夜する程の熱誠振であつた。全同胞共通の福祉のために自己を忘れ、至誠に燃えて、終始一貫互譲協調した美はしい精神に對し、僕は唯頭を垂れるばかりであつた事を茲に特筆しておきたい。

代表者會議に反對を唱へたり、代表者は何をして来たかと嘯く輩よ！君達
は堤防が正に決潰せんとしてゐる危急存亡の秋、それをそのまゝ拱手傍觀して
居れば、諸君は住宅諸共荒狂ふ怒濤の中に卷込まれて押し流されてしまふ事を

覺らず、其の災厄を未然に防止せんがため堤防の修築に努力する人々に向つて、悪罵するのと選ぶところなき事を知るがよい。

街頭寸景

市街スリットを歩いて兵士以外に、二十代三十代の男子を見受けることは稀である。歩道を行く者は老人か婦人又は子供、でなければ兵士である。

早朝、チェーンストアに人々が長蛇の列を作つてゐる。何事かと訊けば、巻煙草購買者の行列だといふので、早速僕もそれに参加して辛うじて一匁を賣つて貰つた。巻煙草の賣出しは週に二三回、それも早朝の一時間をミスしたら買へないのだ。之では普通の職業を持つてゐる愛煙家には到底手に入らず、闇に求める外はないだらうと思ふ。「松原君、又煙草かね。」と加藤氏に笑はれつゝ、早朝の街頭を血眼になつて消えてゆく煙りを追廻したのだつた。

僕等は萬年筆を買はうとしてショウウィンドウを覗き廻つたが、最低一本六十五弗から、ペンシルとセットで百五十弗といふ高價品しか見當らない。十六弗乃至十九弗の月給取には余りに高價すぎる。そこで一案が浮んだ。高嶋君が高價な指輪を買はうとする時、「實は十弗内外の萬年筆を欲しいんだが。」と囁いたのである。「さうですか、澤山ありませんの……。」と言ひ乍ら、店の主人は出して来てくれた。定價一本拾貳弗五拾仙、ラクシユリ贅澤品税二割と州税二分を加へて拾五弗五仙である。

拾仙の必要品を買ふ爲に時には一弗の不用品を買はねばならぬ場合もあるだ

らう。商品拂底の現下、商人と購買者との地位は顛倒して、「どうか賣つて下さい。」と客が平身低頭して頼まなければならぬ。金よりも物が尊い時代である。品物に依つてはレ・ション・テケツがなければ買へないし、それに國税だ州税だのと、僕等のやうな赤毛布はまごつかされる。十仙の雜誌一冊買つても「ニ厘プリース。」と州税を要求される。

日本人町

食料品店、日本料理屋、ホテル、グラデ、新聞社、寺院、住宅等サウスウエスト・テンプル街の一角が日本人町である。一夜、日本料理屋で若い二世男女の一群が賑やかに談笑し乍ら、箸をとつて日本料理を食べてゐるのを見て、その昔の羅府小東京を思ひ起した。お茶漬と漬物が一番美味しい我々なのだ。

「戦前から此の土地に居住してゐた日本人は、開戦後加州を立退いて来た我や、收容所から出て来た同胞を「加州から来た日本人」とか、「センターから出て来た日本人」などと呼んで區別する。と二三の知人が歎聲を洩した。此處で聞いた最も遺憾な話である。

モルモン本山參觀

今から大凡百年前、信教の自由と自主獨立の理想郷を求めて、ブリガム・ヤング一黨が西へ西へと山岳を越え、荒野を跋涉して漸く此の土地へ辿り着いた時、

彼等は多くの入々から「ソートレーキ地方一帯は塩分が強くて草一本生へない。到底生きてゆく事の出来ない土地だから。」と定住する事を諫止されたが、「いや、我々には神が守護してゐてくれる。神の在す處唯榮光あるのみだ！神は我等を必ず生かし給ふ。我々は此の土地に穀物を立派に稔らせて見せる！そして理想郷をつくつて見せる！」モルモン宗開拓者の烈々たる信念が今日の塩湖市を築き上げたのである。信念は恐ろしい力を藏してゐる。不可能を化して可能とするもの、それは信念を措いて他にない。崇むべき哉信念の威力！信念を持ちたいものである。世界動静の刻々たる変化に心を乱されたり、センター開鎖の聲に動揺するやうでは、確固不拔の信念を持つて居る勇士や、銃後で頑張つてゐる人々の前に恥かしい事ではないか。信念に生きる者は断じて狐疑逡巡や動揺はしない。不動の信念に生きたモルモン宗開拓者の前に僕は無條件に頭を下げる。

「この禮拜堂は世界最大です。長さ二百五十呎、幅百五十呎、高さ卅五呎、一萬二千五百人を收容出来ます。又、堂内裝置のパイプオルガンも世界最大のものです。此の堂は千八百六十七年即ちソートレーキ市に鐵道が敷設される二年前に建てられたもので、ウインドウに使つてゐる數萬枚のガラスは牡牛^{オクセン}で遠くミゾリー州から曳いて來たものです。」と案内者の説明。

「モルモン宗は一夫多妻主義を奉持してゐるかの如く解してゐる人が少くありませんが、それは誤解に基くものです。開拓時代、教主が特定の信徒に絶對必要、止むを得ずと認めた場合にのみ、それを彼等に許してきたのです。」とモルモン宗は「一夫多妻」を主義とするものではない。と説明者は強調した。

數は力であるといふ宇宙の原則は即ち神の御心であるのかも知れない。モルモン宗發展のため、モルモン教徒の理想郷建設のためには、一夫多妻も亦一定の時代、特定の信徒には必要又はやむを得ぬ婚姻或は祝福さるべき結婚であつたのではなからうか？ 人類のうち、多くの種族は過去に於て、或る一定の時代一夫多妻又は一婦多夫乃至血族群婚生活を營んで來たことを歴史は證明してゐる。要するに人間社會の凡ゆる制度、風習は、その必要に強制されて、時代と共に幾多の變遷を重ねて今日に到つたのである。

緑なき大地

加藤氏の知人米津夫妻に案内されて、市北端の丘上に聳立する州廳の前に立つ。真正面に塩湖市を見下し、右手は湖を前景にして峨々たるロツキー山脈、左方にはワサチ連山、何れも白雪に覆はれ、陽光を浴びて輝いてゐる雄大なる美觀は僕等の心を奪ひ、暫し其處に佇み眺め入つたのであつた。此處からポストンの季節出所者にお馴染みのレートンを經て、ワサチ山麓のオグデン迄卅六哩、坦々たるハイウエーをドライヴしつゝ、米津夫妻は道すがらの風物や外部の事情などを説明してくださる。

白雪皚々たるワサチ連山の美に心を曳かれて、「美しい！」と感歎詞を連發する僕等に、「私達のやうに毎日見てゐると視神経が麻痺してしまふのか、それ程美しいとは感じなくなり、此の風景にも倦怠を感じて來ますの。」と米津夫人が仰言る。さう言はれて見ると、成程、美しい雪に見惚れて氣がつかなくなつたが、

此の地方には人間の目に最も愉しい縁がない。男の眼に最も愉しいもの、それは女だ。女の眼に愉しいもの、それは知らない。人間の眼を最も喜ばせるもの、それは空の青と草木の緑であらう。此の土地名産のチェリーも枯木のやうに寒風に晒されて立つてゐる。其他の木々も落葉しつくして寒さうだし、大地には唯一本の雑草すらない。

オグデンの街頭に立てば、山上から吹き下して来る風は身を切るやうに冷たい。日曜日であり、寒いからでもあらうが、街頭には死んど人の姿を見ない。淋しい田舎町だ。

歸路

二十七日午後七時、フィックス行の大型バスで歸途に就く。超満員だ。僕等は朝の中に座席を豫約して置いたので幸ひ乗車することができた。バスの暖房装置が不充分であり、ウインドウに隙間があつて冷たい外氣が入るのとで、寒くつて眠れない。バスの中で寒さに震えながら眠れぬ一夜が明けて翌朝七時世分グラントキヤニオンに着く。西の山上には未だ月が懸つてゐるのに、東方の山の端から太陽が昇つて来た。見渡す限り褐色、茶色、灰色、土色など色とりどりの奇巖絶壁が屹立して沈黙不動の姿勢で泰然としてゐる。「オーイ」と呼びかけても答へるものは山から還つて来るこだまの他にはない。静寂なる山中の黎明だ。清澄な山の空氣を胸一杯に吸つて再びバスに乗る。バスが動き出すと處處にインデアンの住家らしい土で築き上げた小さい尖塔が見える。近代文明と

人間社會から離れて此の山中に半原始的の生活を續ける彼等に羨望に似た憧憬を感じさせられるのであつた。巧みに造つた携帶寢臺に幼児を寝かせて、朝の光線を踏んで行くインデアン女の素朴な顔よ！ 彼女の心中、その幼児に對する愛情以外に何かあるだらうか？ 此の山奥に浮世の拘束から解き放たれ、愛し愛さる、

者のみが生活したならばどんなに快樂いであらう。そんな感傷に車上の無聊を忘れぬたが、不圖窓外に目を放つと、既に外界は緑滴る松林と變つてゐるではないか。此の山上には嵐が訪れないのか、松はすべて真直ぐ天に向つて伸びてゐる。その緑葉の上には白い花が咲いたやうに綿のやうな雪が積つてゐる。

松林を越えて来る潮風に叩かれて育つた僕の眼に常緑の松ほど楽しいものはない。松風と潮の音は幼き僕の子守唄であつた。――その枝は例へ嵐のために歪うられ曲げられても、其の葉は飽逆も男性的で尖鋭な戦闘針を持つて真直に伸び、然も兄弟と運命づけられた二人は死ぬとも離れない松葉。邪に向へば一撃の下に之を刺殺し、情には脆い俠客を思はせる松葉よ！ 僕は堪らないほど好きだ。松は僕の心に限りなき生氣を漲らしてくれる。

此の松山の中を縫つてバスは走り、フラッグスタッフ、アシフォークを経て靜かな高原の町プレスカットに着いたのが午後三時であつた。此處で出所中の最後のピアーに別れを惜しみ、五時半、ウィッキンバーグに着く。此處でバスに別れ、七時分發の汽車で我等のふるさとの驛パーカーに向ふ。歸心矢の如くのろい汽車よ！ 十時半、終にパーカーに到着。

(ワトソン氏より種々御世話になりました。穴原御夫妻、米津御夫妻、岩永御夫妻並びに厚く御禮申し上げます。)



幸川 敏

「日は高く睡り足って猶起くるに慵うし 小閣衾を重ねて寒さを怕れず
遺愛寺の鐘は枕を敲て、聴き 香爐峰の雪は簾を撥けて看る……」
唐の白居易（樂天）の詩である。

今から凡そ千百三十年前 畏くも 時の帝（嵯峨天皇）が「香爐峰の雪」と
仰せらるれや 清少納言は颯々と立って簾を撥け御意に召したとか傳へられる
故事があるので 古来日本人の間でも「香爐峰の雪」として愛誦されてきた詩
である。然し 私に取っては「遺愛寺の鐘」としての方が馴染みが深い。

異境に放浪十年 一無名飯國者が初めて故國を訪れたのは 関東震災の餘燼
未だ消えなかつた頃 昔別れた戀人と再逅するやうな心持ちを抱いて岸壁に第
一步を踏みしめたのであつた。けれど 待ち受けてくれてゐたものは餘りにも
泰西化された風物 目に映つる情景 耳を打つ世相 凡べて模倣の権化でない

ものはなく 放浪の旅を了へた者を慰めてくれるやうな姿とて見當らなかつた。そこに搖籃ヨウランがあり そこに祖先の墳墓がある故郷に對する思慕と愛着とは十年の歲月を経ても變つてゐなかつたが 再び實際に接して受けたものは憧憬の解消により襲ふ幻滅の悲哀に過ぎなかつたのである。

ヴヰクトリア王朝時代の遺物かとも思はれる赤煉瓦の建物と俗悪な近代式のビルとが交叉して立つ故郷に居溜らず 幸にも自宅は西の都に移つてゐたので間もなく上洛の旅に上つた。其處には飯國者を受け入れてくれさうな何物かがあるのを期待して――

京洛の巷チヤウに 高雄の紅葉の噂がパツト擴がつてゐた頃 小雨降る日 久しぶりに舊友を訪れやうと 烏丸カラスと丸太町の交叉點で電車を下り 先づ御所を拜し 翠滴ミドリシタたる老松の參差シンシンする木立を抜け 同志社大學の校舎と相國寺シヨウコクの長土堀ナガドバイとに挟まれた街道を更に北へと向つて行つた。

山門の前に差しかゝつた時であつた。天地に活を入れたかと思はれる轟然たる震動に危くも倒れかゝりさうになる身體を辛うじて一本の蛇の目で支へた。相國寺は五山の一つ。入相を告げる古刹の鐘はところ狭しと洛北一帯に殷々と響き渡つた。

時の流れに抗することも出来ない古都 假令 鴨川は疏水ソウスイに遮られ 堀川の水は友禪ユウゼンに濁り 東山三十六峰の木立が煤煙バイに燦クズぶらうとも 猶その内にこそ

現代日本の世相を味讀すべき索引の一つが最も雄辯に點出せられてゐるのであらうことを 立止つて考へさせるだけの餘裕を心に萌してくれたものは 相國寺の鐘が一無名飯國者に與へた靈感によつてであつた。

過ぎ去つた半生 心して聽いた鐘の音も随分多い。奈良に旅して聽かされた

「鐘に怨みは數々ござる……」 下有名な道成寺の鐘。四天王寺「國家安康」

の鐘を聽いた時には漫ろ「沓手鳥狐城落月」豊家の末期を偲んで目頭が熱くなるのを禁じ得なかつた。其の他 山城は櫻翳した醍醐寺の鐘 近江路を歩いて聽いた三井の晚鐘 等々 枚擧に遑がなく凡べて懐かしい思出ならざるはない。

異境で聽く鐘の音は 一抹の哀愁を絡んで寂しい旅人の心を一層センチメンタルにする。米國の旅の空で聽いた鐘の中では リバーサイドドライブで聽いたハドソンの對岸パリセードにまで木霊する聖ジョン大伽藍の鐘聲が最も記憶に残つてゐる。恐らく其處で送つた年月に多くの波瀾があつた爲なのであらう。

南加に移つてからは 土地柄が餘りにも朗かな故なのか ついで寺院の鐘に耳を澄すと云ふやうな心の遊隙を抱いたことはなかつたが戦争突發して立退軍令の發布となるや ボイルハイトのホールンベック公園近くに住んでゐたので四街とシカゴ街の角にある聖マリヤ寺院の鐘を朝夕身に沁みて聽いたものであつた。けれども あの鐘には國境もなく民族もなく異風俗もなく たゞ地上の

ものを一に飯する諸行無常を思はせる音^ネだけがあつた。

一九三九年九月二日は丁度日曜日であつた。ドイツ國境に近い波蘭^{ポーランド}土チエス
トコヴァ市の聖レミイ寺院の鐘はドイツ軍重圍の内にあつて勤行^{ツトギョウ}の時間を猶市
民に告げたと云はれてゐる。寂しさ限りない北歐の灰色の空に響き渡つた鐘の
音は同時に祖國を葬る吊鐘であつたことを思へば桑滄の無常を嘆せざるを得な
いではないか――

今日まで 世界の人々は鐘の音を聴く度に 國家民族の興亡浮沈――幾多の
革命――兵火――流民――饑饉――洪水――其の他 天災人禍の重疊する有爲^{ウイ}
轉變の世相を想はせられて来たのであつた。

世界は再度大動乱に見舞はれて速くも既に六年 人類の相剋はいつの日にか
果てるであらうか？ 不識^{シラズ} 年華流水の如く一去して回停するところない鐘の
音が遮^{シヤイ}迷に苦む者の心に不動の盤針を與へるの日はいつのことか？

筆者の住む部落に寺あり鐘が鳴る。何處で鑄^イられた鐘か 如何なる銘が刻ま
れてあるものかは知らない。音の波長からして餘り大きな鐘ではないやうだ。
併しながら信者不信者とを問はず居住者を慰めてくれることは甚しい。殊に
日曜日の朝などは勤行の心が偲ばれて此の身センターにあるを忘れしめるほど

である。

鐘の音を耳にして湧いた先人の感興には 時代と場所と環境とによつてそれ
ぞれ異つた考察が遺されてゐる。音楽や文學の内に披瀝されたものを窺つて看
る時 洵に千差萬別で非常に興味が深い。

「ノルマンデイの鐘」「ベル」はバレーにも作られてゐる。チャイコウスキイの
「一八一二年」に容れてあるチャイムは曲目を通して如何に重要な役目を演じて
ゐるかは敢て茲に述べる必要もないことであらう。

漢詩の内から拾へば 張継の「楓橋夜泊」俗に世人が云ふ「寒山寺の鐘聲」
月落ち烏啼いて霜天に満つ 江楓の漁火愁眠に對す

姑蘇城外の寒山寺 夜半の鐘聲客船に到る

が最も著名ではなからうか

アリゾナの平原にも寒い冬が訪れる。白樂天ではないが「日は高く睡足つて
猶起くる慵うし 小閣衾を重ねて寒さを怕れず……」である。筆者は偶々起
くるに慵い時 我が部落にある寺院の鐘聲を聴き 靜に過去を偲び且つ現在を
省み猶將來に想ひを馳せざるを得なかつた。

白樂天の「香爐峰下新_ニ山居_ヲ草堂初成_ル偶題_ス東壁_ニ」は 筆者が中學時代に後日
「北京順天時報」の主筆となられた山川草水先生から習つた詩である。北京順

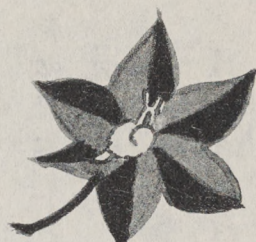
天時報は「霞ヶ関」御聲がりの支那語新聞で新朝復辟問題の際に於ける同紙の活躍の程は可成り喧傳されたものであつた。師は二松學舎の創立者故三島毅博士の門弟曾ての東洋志士その右の消息は否として聞かない。

白樂天は中唐の詩人唐の都長安より江州の地に司馬（州の軍事を掌る官）として左遷せられてゐた時此の詩を誦んだと傳へられ「司馬の官は閑散であつて餘生を送るに宜く聊かも貶謫不平の氣もない。心泰かに身寧ければ此處が我身の適歸する處で必しも都の長安のみが安住す可き都ではない」との心境を吐露した詩であると云はれて居り筆者の最も愛誦する詩であるが何故か寺院伽藍の鐘を聴く都度唇頭に浮んで來るのである。

愚師に教へられて速くも星霜三十餘恍惚として聴いた往時の少年の頭にも霜が下りてゐる。折に觸れ吟誦するもの、奈何にせん語字の配句には甚だ覺束なさを感ずるやうになつた。幸にも此の拙稿を草するに當り當所に大岡周洋氏が居られるので同氏より詩の全文を教へて頂き末尾に添えることが出来たことを嬉しく思ひ心からの謝意を表して置く。

日高睡足猶慵起 小閣重衾不怕寒 遺愛寺鐘敲枕聽 香爐峰雪撥簾看

巨廬便是逃名地 司馬仍爲送老官 心泰身寧是歸處 故鄉何獨在長安



ユトリある人々

芳竹道人

外川氏の望みにまかせて、貴重な紙面をドウカとは思ふが、先般文藝協會の晚餐招宴の席上で「芭蕉翁の風格」といふ大文藝人のやうなお話をしたその一節、知名の方々の辞世の句を少々記して見る。

○
偽り許りの世の中に死するばかりは實^{まこと}なりけり。

生れたんだから死ぬのがあたりまへ、あたりまへだが死にたくない。三代將軍家光公の相談相手だったといふ有名な澤庵禪師でさへも臨終ぎはに「死にたくない」といはれたといひ。

狂歌の名人だった蜀山人は、

冥土からもしも迎へが来たならば九十九までは不^レ在と断れ。

不在といはば又も迎ひの来るならん寧そいやぢやと断はつてやれ。
一休禪師は、

今日までは人のことかと思ひしに己が死ぬとはこいつたまらん。

小野小町と共にその時代の双壁と言はれた、在原ノ業平は、

つひにゆく道とはかねて聞きつれど昨日今日とは思はざりしを。

と辞世の句を。

アノ有名な近松門左エ門はハッキリと、

近松の辞世如何にと人間は死にたくないと言ふたぞといへ。

とうたつてゐる。

尤も死にたくないのにも本田平八郎忠勝のやうに、

死にともなアラ死にともな、君に先立ち死せる此身は。

といふやうなものもある。

何故死にたくないか？

死を怖れ、死を厭ふ心があるからだ、しかし怖れても、厭ふても、不慮か、病氣か、静かにか、華々しくか、惜まれつゝか、憎まれつゝか、何にせ五十か百まで死なにやならん。

こゝに死を習ふ必要がある。尤も習はなくても死ぬはする。

人その人の信迎なり心境なり或はその他等々によるか辞世も様々である。
太田道灌は

昨日までまゝ妄執を入れおきしへん無し袋今やぶれたり。

蜀山人と同時代で有名な十返舎一九は茶化して併し従容たるものを見せて、

此の世をばドリヤお暇にせんころの畑と共にハイ左様なり。

とよみ、酒好きの森谷仙南は、好きな酒と自分の名前を残して、

われ死なば酒屋のコガの下にいけもしや零^{シラ}がモリヤセンナン。

とて辞してゐる。

昔の人否ユトリのある人に辞世の句があつたかと思はれる。

先づ臨終ノコトヲ習フテ後ニ他事ヲ習フベシ。

とは聖日蓮の語である。

安詳として逝けるべく否、立派に生きる爲にユトリある人々の数に入りたいものである。



茶漬の味の圓鏡寺

人間は食ふ爲に生きるのか、生きる爲に食ふのか、と云ふと問題はむづかしくなつてくるが、兎に角人間老若男女、食はねば生きて居られぬのは事實である。そこで食ふとなると、まづいものより、美味^{ウマイ}いものかほしいのは當然である。かうした館府生活をして居ると、刺戟も少いし話^{ワタシ}も少いのでよく食ふ話が出て賑ふことがある。さうした時きまつた様に、美味^{ウマイ}しかつた御馳走を食つた自慢話になつて行く。私も随分かうした話をしたが、誰でも一度や二度は話してゐると思ふ。人間の本能にもどるわけで面白いと思つてゐる。

スキヤキの味は吾々には格別であるが、なんと云つても関西地方が一番で大阪、神戸では實に美味^{ウマイ}しいが、スキヤキ通は自分でクツクが出来なければならぬ。ダシ汁と味淋酒を上手に使へたら一人前であるらしい。私の學生時代には懐工合が一すよいと、スキヤキを食ひに出かけたものである。實に上手に私達は食つたものだ。上手と云つても食べ方ではない。それは先づ同輩が二人でスキヤキ屋に出かけて、二人前の注文をする。二人はさも二人切りの様におさまり切つてゐるが、ちやんと計畫があつて、スキヤキが煮へる頃を見はかつて偶然にこのスキヤキ屋で落合つた様な涼しい顔をして、他の同輩が二三人同じ空に入り込むのである。入り込めばもうしめたもので、後から来た同輩の

ポケットや懐には上等肉が二百枚も三百枚も入つてゐる。その上下宿からネギまで切つて持つて来る、砂糖も用意されると云ふ周到さだ。思ふ存分に腹一杯食つて、スキヤキ代ニ人前を支拂つて歸る。安上りですむわけである。店主も知つてはゐたが、うが咎めもしなかつた。

東京の銀座裏に「山の家」と云ふ店があるが、こゝは風変わりなおでん屋で、何から何まで「山の家」の名にふさわしく山奥の感じを出させやうと工夫してある。圍爐裏に薪をくべて錫燗で一杯やる感じは悪くない。女中さんは居ない。店主であらうがモンペを着てゐたが、無口で必要なだけより話をしない人が唯の一人で接待してくれる。こゝで一番美味^{美味}しいのは、山いものテリ。焼であるが、うなぎの様な焼け具合でいもとは思へる美味^{美味}しさであつた。

神戸の山の手の静かな所に、店の名を失念したが、黄蘗料理^{黄蘗}で有名な精進料理屋がある。禪宗の黄蘗宗から出た料理方法であるらしい。こゝの精進料理屋も風変りで、客が来ると木魚をポクンと打つ。手をついて出迎へてくれるのが、腰衣^{ゴロモ}を着けた十二、三歳の小僧さん。頭も青々としてゐて本物のお坊さんの様であるが僧侶ではない。唯の給仕だが簡単なお経や作法を心得てゐるのにはひきさがつた。客が座敷に入ると線香を立て、薄茶を持つてくる。料理が出来上ると、カン／＼と寺の鐘を打つて合圖をする。豆の料理と云へばあまり問題にしないが、こゝで食つた豆の料理はよくも豆がこんなに美味^{美味}しく出来たものと感じ心して食つた。

鮭^{サケ}や鰯^{イサナ}と云ふとあまり上等の魚ではないが、本場の北海道で食ふのは別で、

實に美味しい。その筈で北海道では正月のお雑煮にも鮭や鰯の卵が入れてある。鳥賊の刺身は海から上った生きのよいのを、うどんの様に切つて食ふのだが、口の中でとけて行く様に美味しい。

朝鮮料理も京城で本式のを食つたが支那料理と似てゐる。朝鮮でも支那でも同じ様に油こひ所に良い所がある。支那料理と云つても、私の食つたのは満州だつたので、北京風な支那料理で鰻のヒレとか、燕の巢が上等の御馳走である。あちらの日本人から聞いた話であるが、ダシ汁は蛇から取るのださうで、それが大きき釜でフタには澤山に穴がある。其穴は蛇を釜で煮る時、蛇は熱さの爲に釜のフタ穴から首を出す。それをすかさず切り落してしまつて煮るのださうである。見た事はないが驚いた話である。北京に家鴨料理で有名な店があるがこれ又實にうまい。うまい筈だ。ちやんとくまくしてから食ふのである。先づ家鴨を食ふと思ふと友人と共に店に行き、家鴨の生きてゐるのを色々見て、これと思ふのを一羽なり二羽決める。その上に泥鰌を幾らか買ふて家鴨に食はせるのである。その日はそれで歸つて一週間位してから、家鴨がよく肥えて油がまわつた頃に食ひに行くのである。なにか知らぬがネギなぞをまぜ合せて餅の様なものゝ中に包んで食ふのであるが、これも飛び切り美味しい。支那人風な悠長さがあつて面白いと思ふ。

アメリカに渡つてから、廣東風の支那料理、イタリヤン料理、スパニッシュ料理、聖林にあるスエーデン料理などと随分食つて、どれもまづいとは思はなかつたが、日本人の私には大阪の道頓堀裏にある、茶漬専門の店で、上等な茶良漬を、よいお茶でサラ／＼と食ふ茶漬の味は忘れられない。(完)



隨
想

辭林

外川明

「パー！ どうしたの？」

寝かけてゐた八歳の次女に、衝立の蔭から聲をかけられた私は、少時返事もせず、ポケットと云ふポケットに皆手を突込んで探してゐた。無い、どうしても無い！ 途に落したのかそれとも教室に忘れて置いて来たのだらうか？

「どうしたの？ パパー！」

再び幼い聲に責め問はれて、「うん、パーはね、デクシヨナリイを失くしたのよ」と漸く返事をした。

失つたのは三省堂発行の小型の辭書、英和と和英が一冊になつてゐる至極便利なものである。立つたまゝ暫く考へてゐたが記憶が判然りしない。そのまゝ翌朝まで放つて置くのも氣がかりだったので、近所のSさんから懷中電燈を借りて来て、歸つて来た路を逆に、探しながら學校まで行つた。途中にも見當らずに、闇の中に閉鎖された扉の前に立つた時は、一寸さびしく感じたが、ふと氣が附いて裏へ廻り、窓から懷中電燈の光線を射し入れ、テーブルの上に無事

な辭書の小さな姿を見出した時は、さすがに嬉しかった。

此處へ移されて来る以前、若し自分も〇〇〇に引張られたら、他の荷物を持たなくともこの辭書一冊だけはポケットに入れて行かうと思つたことさへあるものなので、それを失つたと思つたその晩の自分の周章振りは、後から考へて見れば可笑しくもなつて来る。

辭書といふものゝ重寶さは今更言ふまでもないが、私は近頃、度々辭書に向つて、「ありがたうございました」と小聲でお禮を言ふ。覚えても／＼覚えてきれない無数の文字、學んでも／＼學びきれない無限の言葉を、何時でも、深切丁寧に細々と教へてくれるのが辭書、當然と云へば當然のことだが、獨學で押し通して来た私には、特別にも有難く感じられるのである。

今手許にある四冊の辭書の中で、私が一番多くお禮を言ふのは、これもやはり三省堂發行の「廣辭林」である。小豆色の華の表装に金文字入り、五寸に七寸の廣さで厚みが一寸五分、昭和十四年十月十日の發行、特價四圓拾錢、紙質も良く、外見も内容も申分のない立派なものである。

在米廿數年、然し、持つて生れた文藝趣味に禍されて、物質的には殆ど無一物で日本へ歸つた友人Mが、こちらから色々の物を送つてやつたその返禮の意味で送つてくれたのがこの辭林、念入りの彼の選擇だけあつて私もすつかり氣に入つてしまつたのである。だからこの辭書は色々の意味で特別にも貴重であ

り、親しみも懐しみも深いのである。

日本へ歸ってから凡ゆることを試みた揚句、點条術を覺えた彼は、灸を据ゑることによつて漸く落着いた生活をするやうになつたらしく、時々手紙をよこして、「SLONZ'S「LINEMENT」を選つてくれと言つたものだ。日本では買求められないあの塗り薬を、點条術とほどよく交ぜて使用し、患者から大変喜ばれてゐると云ふことを聞いて、私も蔭ながら悦んでゐたのだつた。此のキャンプ内のキャンテンに行つても、いくらでも買得るあのスロインス・リニメントも、もう絶對に手に入れることの出来なくなつた今日、彼は嚙不自由をしてゐることだらう。

それにしても良い貰ひものをしたのは私である。この辭典を開きながらもを書き、この辭書に解釋して貰ひながら讀書してゐたら、收容所生活にも大して退屈も感じない。退屈どころか、その奥知れる深い辭の林に分け入り、何も彼も忘れて、キャンプ閉鎖問題さへすっかり忘却してしまふのである。

今朝も、春めいて来た空の、「浅黄色」と云ふ文字に不審を抱いて、この辭林を開いて見たら、「あさぎ」「浅葱」(名)うすきあるいろ、みづいろ、そらいろ、浅葱櫻、浅葱裏、浅葱の頭巾」等々と書いてある。成程、浅い葱色とは味ひ深い文字である。とひとり悦に入りながら思はず、「ありがたうござりました」と又お禮を言つたのであつた。

(一九四五——二月十五日記す)

隨筆

健康法

伊藤四郎

私未だ廿歳には程遠い頃東京では健康法として二木博士の腹式呼吸法が相當世間に論議されて居った。殆んど時を同ふして岡田式靜養法が亦隨今盛んに用ひられて居った。雜誌實業之日本は身心の革命時代が來たの、救世主の再現等と盛んに書き立てるものだから、私も牛込區矢來町の靜坐道場へ行つて見た。時々朝二時に起きて冬の寒風に晒され乍ら神田から池袋のお寺へ行つて岡田先生の指導も受けた。會する者學生、官吏、會社員、銀行員、女子大學生、女子高等師範生も見受けられ、日曜には陸軍將校連中も少々來て居った。二木博士にも面會の機を得て直接の御話も聞き、博士の著書も耽讀したのである。東京のみでも是等の健康法を認める者幾萬人、如何に強健ならんと願ふ人の多いか、伺はれた。私は悲しくもあり、嬉しくもあった。總じて言へば兩健康法とも氣海丹田は生理的に身體の中心なれば、此の中心を失はずして自然の呼吸をなし、自然の姿勢を保てば心も確かりと身體も丈夫になり、諸病は雲霧の如く消散すると云ふにある。其の方法に就いては頁が長くなるから此所には書けな

い。其の當時靜坐法の本は、数ヶ月の中に二三十版を出すといふ有様、洛陽の紙價を高からしむる感があつた。次いで藤田式息心法の本も讀んで見た。二本博士の言はるゝがまゝに佐藤一齊、貝原益軒の養生訓が上野の圖書館にあつたから繰り返し／＼繙いて見た。徳川時代の禪門の豪僧、白隱の夜船閑話、支那有史以来の名醫と言はるゝ、素門の養生訓が筑後久留米の梅林寺にあることを聞き、梅林寺を訪ねた。梅林寺は臨濟宗の名刹にして、竹田黙雷師も師事したところある名僧猶禪の住寺であるので、猶禪の風格に接したいといふ好奇心もあつたので梅林寺を訪ねたのであつた。

筑後川に臨んだ此の山門は正しく別世界であつた。又、生活は嚴格其のものであつた。流石に修練の道場たるを思はしめた。和尚は一日衆を集めて真底の禪門には病氣を知らず等と言つて居られた事があつた。九月の下旬私は別れを告ぐ可く和尚の室に這入つた。和尚は初めて夜船閑話に於ける内觀法、素門の養生訓の話をされる。一々検討して微に入り細に亘り現代醫學、生理學を引用して説明せられた。靜坐法の本も腹式呼吸法の本もちやんと讀んで居られた。和尚の博識には驚かされた。其の後川合式健強法、西式健康法等々と次々に世に出て來た。是等多くの健康法は、創始者自らの性來の虛弱を普通以上の強健體と化せられた實證物である。聞いて見ても讀んで見ても道理に領かれる。私は皆さんに是等の健康法を日常修練せられん事を勧める。生長の家も立派な文

献であると思ふ。白隱、益軒の如き八十五歳の高齢を保ち、自らの健康法により倦む事なき活動勉強は遂に青史に名を留むる様な事業をなし遂げた。

養生法には酸素療法、日光療法、食餌療法、電氣療法、藥餌療法、轉地療法、運動療法、信仰療法、結婚療法等々がある。

素門は其の著書の中に「俗醫は既に病んで之を治し名醫は未だ病まざるに之を治す」といつて居る。我々は平常病氣に罹らないやうにするばかりではなく、一層進んで丈夫な身心を鍊へて置かねばならない。上述の健康法はどれも立派な根據の原理を含んで居るが、或る法は少し信仰信念の奥に潜む力の説明に缺けては居ないかと思はれる。少し大き過ぎる例ではあるが日蓮、ルーテルがあの迫害攻撃の中にあつて少しも健康を害せず勝者の如き意氣を失はなかつたのは、其の信仰の賜ではあるまいか。スタンレー・ジョンズは一昨年秋第四ブラツクの舞臺での話の中に「死すべき筈の賀川豊彦が死なゝいのは、余り忙がしくて死ぬのを忘れて居つた」と實に味ふ可き名言である。我々の前途は戦事中と雖、戦後と雖、豫想以上の困難、難儀に遭遇すると覺悟せねばならぬ世界といふ大船は暫くは大難航海を續ける事だらう。我々の身體は疲れ果つることもあらう。我々の心は幾度か失望に悩む時もある。此の疲勞、失望に打克つ唯一の武器は、強健なる身體と鐵の如き信仰信念である。



ポストン生活印象

(七)

物情さまざま

貴家志ま子

この轉住所居住民との毎日の接觸に最も大きな役割を掌つてゐる部落二十八の賣店には、炎熱に乾ききつた喉を潤さんとして寄り集る人だけでも、店内は毎日立錫の餘地なき程の賑ひである。最初賣店は一ヶ所であつたが、数ヶ月の後にドライグーズ品だけこの賣店から少し離れた場所に移され、店内の混雜は餘程避けられるやうになつた。その内に部落十八と部落三十五の空地に小屋を建て、またそこでも僅の食料品など賣捌くやうになり、これらの賣店は後に共同組合となつたのである。賣店で販賣されない物品は、どの家庭にも常に備へられてある大きなキヤタログに依り外部の店に注文するのである。

追々ところの生活にも馴れて來たのだが、水と電氣が屢々止まるのには閉口した。特にかゝる場合病院はいふに及ばず食堂と厠の困却のさまは甚しかつた。電氣は全住民の日常の使用を充分に満たすだけの量に乏しく、電氣アイオンは一定の時間を限り、一つのバラック内に一人以上使用出來ず、使用後は必ずそれを部落事務所へ返すのである。其他の電氣器具は悉く事務所へ預けて置かな

くてはいけなものである。然し病人或は嬰兒のある家庭のみが醫師の證明書を貰つて、後に是等の器具の使用を許されたのであつた。ただにこの電氣使用の規定に係はる事のみでも、當時の部落事務所にはさまざまな問題が常に絶え間ない有様であつた。

七月廿二日午後、例の砂煙を巻き上げる風が刻一刻と烈しくなり、遂に暴風雨となつて沙漠の凄しい大嵐が襲ひ、そここの屋根はメリメリ剥がれて飛んだ。私のバラツクの屋根も剥げる音がした時には、家屋までも覆へるのではないかと恐怖に戦^{おの}いたが、さしたる大事には至らずして暫時に静まり、夕刻になつて平穩に復し一同ホツとした。第一キャンプでは私の住んで居る部落が最も風の被害が多かつたとの事であつた。嵐の去つた屋外のそここの地面に剥がれ落ちた屋根板の破片が散在してゐる傍に、人々は寄つて来て何か道具でも作る材料にとよささうなのを撰んで引き出し初めたが、部落長はそれらの人に對して、當局がこの被害の有様を調査に来るまでは、破損の個所はすべて其儘にして置かなくてはならないと注意を與へて廻つてゐた。

八月十日、入所以来初めて大きなアイスが二個食堂へ配給された。子供も大人も狂氣の如く喜んだのである。

暴風雨のあつた二三日後、焼け附く地面の熱氣は靴底から腦天へ透^しみ透るやうな炎天に、インディアン^{インディアン}の男が電柱の倒れたのを立て直し、其高い所に登つて

電線をつけてゐる下で数人の子供等が上を仰ぎながら「キヴミ― アイスウオ
ター ユーカムダウシ ヒーヤ ハリアツプ」などとめいめいに騒ぎ立ててゐ
た。男の腰につけてあるアイス水の容器が、子供等の眼に止まって欲しくて堪
まらないのである。聴て男は降りて来て子供らにアイス水を與へてゐた。そこ
へ又二人の婦人がカップを持って貰ひに來た。男はこの婦人達にも領けてやり、
彼女達が立ち去ると彼は何か呟きながら通りの道に出た。

九月から部落事務所では日誌を認めるやうになり、住民の種痘、腸窒扶斯の
豫防注射、食堂就働員の體格検査、家族調査などそれからそれへと順次に行は
れた。

十月十五日は學校開始で學童らの各自腰掛を手に抱へて、登校の道筋を歩い
て行くさまを私は暫し打眺めて感慨は多かつたのである。豫てより協議されて
ゐた外部就働者もこの頃から少しづつ、出はじめた。

十月廿日、第二部落事務所では諸事に渉る住民の質問、抗議、提案等を投書
するやうにと、其投書箱を一個づつ男女の厠の内に備へつけた。窓のスクリー
ンもこの頃配給に及び、十一月に入ってから男子就働者は職業紹介所へ行つて
外套やうの防寒着を貰つた。以前ここから與へられたジャケツも今回の物も總
て前大戦當時の陸軍用の衣服らしかつた。男子らがこれを着て歩いてゐるキャ
ンプの風景は、轉住所生活の特異な情趣のひとつで記憶に深いものがある。

マトレス、オイルストーヴも全部に配給する程の數に満たないので、それらの品が事務所へ届く度に、部落長は食堂で抽籤に依つて分配してゐた。

十一月十八日、住民に関する一事件が突發し、事態の推移を憂慮されたのであつたが、終始一貫全同胞は慎重なる態度を持ち、廿三日夜圓滿無事に解決したのであつた。この事件は例の如く諸新聞に依つて大々的に報道され、全米市民に「轉住所」に對する関心を持たせたのであつた。この事件は色々の意味に於て、我々の終生忘るゝ能はざる事件であつた。

第二部落の厨では煮焚きのペンが少くて不自由の爲、各家庭から一疋づゝを集めてそれを求める事に協議一致し、幾つものフライペン及び一度に澤山焼けるベーキングシートを買ひ求めて、不自由の中のいさゝかを補ひなどした。

十二月二十四日にはクリスマス プレゼントを贈られたので、子供らははしやいで其の包を抱いてにこにこしてゐた。食堂はクレーパーパーで美事に飾られ、夜は二世男女のダンスがあり、廿五日にはローストターキーの御馳走が出て同胞一同舌鼓を鳴らしてゐた。

十二月二十九日は部落の餅搗きで食堂に續く厨の外側にオイルの空鑊で竈を作り、蒸籠セイロも白も手製の品で、白は矢張りオイルキヤンを二つに切り、其中にセメントを詰めて白の凹に形づくり、杵はメスキッドツリーなどで拵へ、其柄

には古幕の柄を蔽めたものなどあつて、男子等は替るがはるその竈の周圍で一日中餅搗きをしたのである。この糯米はキヤンプの各部落に配給されたもので、大晦日には一人前幾つづつかの餅を分配され、誰もが豫想してゐなかつたこの年越に皆々の心は如何程か足りたのである。斯くして入所の年、千九百四十二年は逝き、新たななる四十三年の元旦を迎へたのである。

附記

以上七回を以て入所の年の同胞の轉住所生活約半年間の大體を書き終りました。顧てつけ加へたかつた数々を思ひ合はされます。最初ペンを執つた時は終まで順序正しく現在として書いてゆく積りでありましたが、時間の餘裕や物事の正確の調べなど思ふやうに出来なくなりまして、色々の障害の爲それは不可能となり、初めの目論みは失敗に歸しましたので、中途から書方が違つて行きました。次に部落内の事は私の住んでゐる部落の事柄を土臺として書いて居るのですから、全キヤンプの部落に共通しない点もあります。もう一つは轉住所閉鎖が發表になりました。ここの生活も限定された爲、今月の記事は色々な事が一足飛びに駈足となりました。一寸附言いたして置きます。



寶石の話

新関惣太郎

今日吾々の住んで居る地球の中には鑛物として學者の稱するものは約壹千種類に餘るのでありますが、其内百種に近いものが古今東西に於て、寶石として裝飾用又は戰時下の今日なくてはならぬ工業用として、用ひられて來て居るのであります。

さうして其百に近い寶石は勿論大部分鑛物に属するものでありますけれども例外として茲に植物性のものが二種、動物性のものが二種斗りあるのであります。それは植物性のものに「琥珀」*Amber*と「黒玉」*Onyx*、動物性のものに

「眞珠」*Deeper*と「珊瑚」*Coral*であります。或る人は此寶石類を稱して

鑛物界の花

と申して居りますが、實にこれなど久遠に萎はぬ花、永遠に色を失はない花であります。王朝は亡び、勇士は去り、美しい女王も社交界の花形も皆等しく歸らぬ旅へと旅立つたのであります。獨り彼等の賞玩せし寶石のみは當時の装ひを其儘に、美しく光り輝いて、私共にありし日の榮華を物語つて居るのであります。誠に寶石は消えざる歴史と多くのローマンスを秘めて、活きた教訓を私共に囁やいてゐるのであります。

地質學者

や鑛物學者の説に従へば、約六百萬年以前オーストラリアにある美しいオーパルが創^ゾられて、略^大同年代に遙か数千哩を距つた南アフリカのキムバーライト・パイプの中にダイヤモンドが出来上つたと申して居りますが、或る科學者は此のキムバーライトパイプよりもダイヤモンドの方が古いと申して居ります。何れにせよ、之等の寶石類は、天地創造の元始に出来たものではなく、後世第二次的に出来たものらしく、此点石油や石炭と同じものであります。而も地球外皮の冷却作用と上部からの壓力によつて出来上つたものでありますから、今日も尚地下の或る部分に於ては盛に製作の道程にあるのであります。自然界のラバルトリーは恐ろしい力を以て秘密地下室に於て、寶石の大量製産を爲しつゝあるのであります。

近來化學

の進歩と共に、人造寶石の製作も頗る發達いたしました。ルビーやサファイヤ等は殆んど自然界のものと異なる事なく、其色彩、其硬度、其美しさに於ても全然見分けの付かぬ迄に出来るやうになつたと云ふ事も、實は自然科學の研究の結果、大自然の製作道程と少しも変わらない人工の形式と材料とを用ゆる結果に外ならないのであります。

夫れでは其の尊い高價な寶石の材料はどんなものを使用するかと申しますと、皆様がビツクリするに異ひないものであります。寶石の王座を占むるダイヤモンドでさへ、科學分析の結果は、⁽²⁾と言ふのでありますから「純粹の炭素」であります。炭素は皆様も御承知の通り、ポストーンに於て毎年秋から冬にかけて諸處方々で焼く「木炭」と同じものでありますから、各メスホールの三本の

煙突から日夜吹き出す「油煙」も結局ダイヤモンドと同性質のものであります。又近來、急に流行し出しました「スター・サファイヤ」や「ルビー」の如き寶石も實は私共日常生活して居る「鍋や釜」のアルミニウムと大同小異であります事は、今更申上ぐる迄もない事であります。次に寶石界の女王と稱せらるゝオーパールですが、之れも化學上の記號を表はしますと「SiO₂・nH₂O」⁽ⁿ⁾と言ふ事になりますから「酸化珪素」に幾分の水が化合して出来たものであります。あの虹を欺く七色の光は實は無数の目に見えぬ「小鱗」^{（イリデスセント）}であります。美に對する吾人の憧憬と昔からの神話や傳説等に依つて、私共の目が暗まされて、之れに氣が付かない丈の事であります。

斯様に申上げますと、如何にも寶石等と云ふものは、一向値打のないものゝやうに聞えますが、價值の問題になりますと、又異つた方面から論じなければならぬのであります。單に化學上の分析表にのみ根底を置くと云ふ事は至極危険であります。人間に於ても然りで、肉や骨や人間組織の材料に依つてのみ價值判斷を下すとすれば、恐らく大した値打のあるものではありますまい。同じやうな事は寶石類にも適用さるゝのであります。需用供給とか、要不要とか別に經濟問題にも重きを置いて考へる必要があると思ひます。

人間と寶石の關係

扱てそれならば人類は何時の頃から此の寶石と云ふものと關係を持つやうになつたかと申しますと、之は隨分古い話であります。恐らく歴史以前、即ち人類發生後間もない事ではないかと想像されます。勿論今日吾々が市井で見るやうな寶石ではなかつたでせうが、沙漠

とか、河原等で見付けた美しい小石を其儘或は之を磨いて愛玩して居ったものに異ひないのであります。

現にヨーロッパの西部にある是等原始人の住んで居った洞窟の中には、彼等の使用した石器や又は装飾用として用ひた寶石類が残つて居ります。殊に其首飾等は餘程苦勞して穴を開けたと見えまして、初め一方の方から開け、次に反對の方から開けまして、真中で會ふやうにしてありますが、之は自然に覺えた當時の大發明であつたでせう。

又當時の人々は大體に於て裸體でありましたから、或る一定の場所のみを毛皮か木葉等で掩ふて居つたのでありまして、今日吾々のやうにポケットとか懐等の如き物を秘すべき場所を持つて居なかつた爲に、かうしたものを作つて首とか、腕とかに巻付けて歩いたものに異ひないので、之が亦一番安全の方法であつたに相違ないのであります。之即ち後世の首飾り、又は腕輪の元祖とも言ふべきものであります。又、

カルデヤ

地方のユフラテ河 Euphrates やテグレス河 Tigris の近傍に住んで居つた住民は、初の美しい木の實とか、川邊に繁茂して居る葦や蘆の莖を適宜に切つて之を絲に連ね、装飾用に使つて居つたのであります。之がダン／＼石に代つて参りました。現に同地方の古代遺物の中には澤山のシリンドラー型の玉類がありまして、其中には蘆や葦の節や模様を彫んだものがあります。

又之等の原始人が氷河期の直ぐ後に作つたと思ほしき首飾の中に、四十七個

の熊の歯と三個のライオンの牙」とで作ったものがありますが、之等は恐らく後に「曲王と管王」と言ふものに變化して來たのではないでせうか？ 現に日本の古代の人の遺物や風習には、此のカルデヤ文明の風習に似通つたものが屢々見受けらるるのであります。

さうして之等のものは單に裝飾用として用ひられた斗りでなく、當時或る一種の宗教上の意味からも使用されて居つたらしく、今日で申しますれば各自の氏神様とでも言ふべき守神の名を刻んで安全に「彼世」に渡る事の出来るやうに、と之を何時も其首に掛け或は巻いて居つたものだと言ひ傳へられてあります。更に又、此の

エフテ河

を溯りますと、今日のトルコ即ちアジア・ミノールに到るのであります。其處には昔、ヒツデスと言ふ處がありまして、(Euphrates) 茲は尚一層石細工に進歩して居つた處でありまして、始め石に唐玉黍形の道具で少さな穴を開け、そして其穴に皮の細い紐を通して、夫れに砂を付けまして擦りました。さうして何遍も繰返して次第に其穴を大きくして、最後に不細工な指輪を作つたのであります。之恐らく世界で一番古い指輪の初めであらうと申して居ります。更に降つて

エジプトの時代

に参りますと流石は古代文明の華とも稱された程に、今日尚私共も驚くべき作品が澤山残つて居ります。殊に金屬の發明と共に黄金やブロンズに鑲めた色様々の寶石は實にスバラシイもの斗りであります。

吟詩漫筆 五

大岡周洋

「進むべき道もなければポストンで造花裁縫將棋木細工」日米開戦以来吾々ニ萬の同胞は住み馴れし加州を後にポストンに送られ、五十年来辛苦經營の基礎は根底から轉覆、經濟的進出は全く遮断せられたれど、一面精神的方面には大に恵まれ餘念なく聖書聖典を研究し、特に田舎に居て生花造花裁縫等習得の機を失へる人に取りつてはポストンは又となき天國であつた。併し加州がオーブンされた爲に、「陽関三疊曲」に送られて、出所する人があるであらう。

陽関三疊曲送元二使安西 王維

渭城朝雨濕輕塵、客舍青青柳色新

勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人

此詩は安西、渭城、陽関の地理的關係を知らないという意味は分らない。安西

(西域蕃地に近き地名、唐代節度使のありし所) 渭城(秦の都咸陽の東北) 陽

関(漢書西域傳に「沙州壽昌縣東接漢

扼以陽関玉門関、即陽関玉門関」とあり

北方匈奴を防ぐ二つの関所である。)

此の詩は唐代以来送別會の席上で吟誦されてきた名詩である。第四句を三度

重ねて吟じる所から三疊曲の名がある。

大石調陽関三疊曲

渭城朝雨、一霎濕輕塵、更灑遍客舍青青

弄柔凝千縷柳色新、更灑遍客舍青青

千縷柳色新、休煩惱勸君更盡一杯酒

人生會少、自古富貴功名有、定分、莫遣

容儀瘦損、休煩惱勸君更盡一杯酒、只

容儀瘦損、休煩惱勸君更盡一杯酒、只

容儀瘦損、休煩惱勸君更盡一杯酒、只

恐怕^{キョウフ}西出陽關^{セシツヤウカン} 舊遊如夢^{キウユウニョウム} 眼前無故人^{ガンゼンニムコトナシ}

只恐怕^{シカウフ}西出陽關^{セシツヤウカン} 眼前無故人^{ガンゼンニムコトナシ}

音律に詳しい李白王維の如きは全力を歌の方に注ぎ、此の「陽關三疊曲」は王維自身の作曲である。

唐代天寶の時人あり、秦樂の圖譜を得たり、其名を知らず。王維之を視て曰く、此れ霓裳第三疊第一指なりと。その人樂工を集めて之を按ずるに、果して王維の言の如くなりしと言ふ。その音律に精通する此の如し。宜なり。陽關の一曲千古に豔誦して終に一人のこれに勝を爭ふものなきを。

鹿 柴

王 維

空山不見人^{クウサンミツケナシ}

但聞人語響^{タンブンニョゴウ}

返景入深林^{ヘンキョウニシロコ}

復照青苔上^{フクシロコ}

竹里館

獨坐幽篁裏^{ドクサウユウヤウリ}

彈琴復長嘯^{タンキンフクナウ}

深林人不知^{シロコトナシ}

明月來相照^{メイグハクライサウシロ}

王維は詩人として有名なると同時に畫家として有名で南畫の開祖である。

徳川時代に流行した文人画は此王維の流を汲んだものである。

蘇東坡は王維の詩を評して、詩中畫あり、畫中詩ありと賞した。

張彦遠は詩は有聲の畫であり、畫は無聲の詩であると言つて所謂詩畫一致の説を立て、居る。

王維の精致は李白の飄逸杜甫の沈鬱高適岑参の悲壯と對照せらる。

李千麟の「唐詩選」に當時一流の詩人であつた白樂天、杜牧の詩は初唐風格に合はずとて一首も收めず、又王維の絶句を選して「凝碧池頭」と「西出陽關」の二首に及ばず、此は是大可笑の事、顧るに陽關三疊は尤も多く人口

に膾炙せる爲ならんか。

陽関三疊千古に豔誦せられ朗吟する者誰一人として知らざるなし。故に送別會席上で變つた詩を吟じたい人の爲に、

送李侍郎赴常州

賈至

雪晴雲散北風寒、楚水吳山道路難。

今日送君須盡醉、明朝相憶路漫漫。

雪は晴れ雲は散じたれども冬の風は

寒し。況して君の赴かるゝ吳楚の山水

は道路甚だ困難なり。今日君を送る宴

を開きたり。君須らく十分の醉を盡さ

るべし。明朝に至りて相憶ふとも、路

遙かに隔りて再び此歡を共にすること

能はざるべしと。

送人使河源

張謂

故人行役向邊州、匹馬今朝不少留。

長路関山何日盡、滿堂絲竹爲君愁。

我舊友は官命を帶び邊境へと、今朝

一人馬に乗りて出發暫も留らず、長き関山の路は何の日か行き盡すべきならん。その行役の苦を思へば娛しますべき滿堂の音楽も、反つて愁を覺ゆと。

贈別

多情却似總無情、

唯覺尊前笑不成。

蠟燭有心還惜別、

替人垂淚到天明。

多情の極は却て全く無情に似て涙を

催さず、唯暗然笑をなす能はざるのみ。

而るに無情の蠟燭が心ある如く、人に

替つて惜別の涙を垂れて曉に到れりと。

送別詩

長州藩士

山縣周南

休唱陽関三疊詩、

陽関三疊不勝悲。

送君多馬川邊柳、

折自南枝至北枝。

山縣周南は物徂徠の説を承け更に服

部南郭の門に入つた。南郭其異才を敬せり。

其後名聲大に擧り教を乞ふ者教を増し、

太宰春臺の如きは海内無雙と言へり。

○ ポストン文藝 詩壇

外川明造

口 笛

牧 さゆり

渡り鳥が一群れ亦一群れと見えるやうになつて来た。

手折つて来たやなぎらしい木に今日は二つも芽が見えてゐる――

ふつくらとふくらみをもつて来た木や草の生きやうとする力。

珍らしく陽の暖かさにつゝみきれない幸福を感じて歩くと――

久しぶりにかそけく鳴く鳥の聲を聞いた。

枯れてゐた草や樅木もやうやく元氣づいて見えた。

私は黙つてぢつとその中に佇つてゐた。

いつまでも佇つてゐたいと願つて見た。

来る日も 来る日も

どれ程のいつはりの言の葉が唇からもれるか知れない。

相對してゐて語るいつはりのこゝろの多いこと——。

言葉の出た刹那——私の魂は 私の心は ウツロなるひびきを
感じないでは居られない、

語った瞬間に私の夢が 私の希ひが 私の望みが けづられて行
く心淋しさを感じる。

黙々としてゐる時は嬉しい、

黙々としてゐながら語り得る草や木に對してゐる時は嬉しい

草や木に臥してゐる時は嬉しい。

あをむいてねたまゝ

大空にむかつて口笛を吹いたら——。

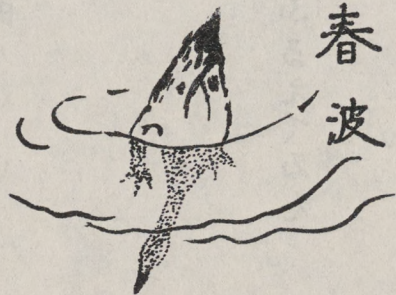
笛の音が寂々としてふるえてゐた、

心の響きのやうに——。心のさけびのやうに——。ふるえてゐた。

ふるえながら 蒼空の中へとけて行つた。

鴨

木内春波



バラツクの前の魚池に

一羽の鴨が浮んでゐます

Aさんが魚釣の歸途

捕へて来たのださうです

誰かのツラップに掛つて

自からもぎ取つたのでせう

水かき足が一本……………

それに一番大切な翼すら

飛び得ぬまでに傷いてゐるのです。

投與へられた一片のブレッツドすら

見向きもしない深い^{かなしみ}悲愁

親鳥もありませうし

兄弟鳥も持つてゐませうに

鴨はひとりしよんぼりと

小岩の蔭にぢつと考へてゐるのです

青紫色の頸毛は美しく

朝の陽光に輝いては居るけれど……

平和に見える庭池の中ではあるが

すっかり自由を奪はれてしまったお前

たゞ運命だとか 宿命だとか

諦められやうか飛べない鴨よ！

自然と自由を愛するお前が

片脚片翼で もがき苦しむ胸中を

私は眞實うに同情はしてゐるが

お前の前途の豫言はしたくない

お前の運命と現在の私の運命とを

ぢいっと……心の鏡に寫して

覗てゐるのです 鴨よ！

過失

青木伸

『ひと一人得るにすぎざることをもて

大願とせし

若きあやまち』

石川啄木の歌を思ひ出す日です

外には剃刀の刃を含んだ北風が吹いてゐます

土を 埃を 砂を 塵を 吹き飛ばしながら

漸く伸び上った若い樹々の梢も

折れんばかりに烈しく吹きすすんでゐるのです。

美しい栗色に仕上げやうと思つて

ブラウンのペイントで塗つたテーブルだのに

見苦しい土色に変わってしまったので

後悔しながら石油で拭ひ除らうとしてゐると

人間の過失といふことが次々に考へさせられるのです
拭つても、元の色にかへらないといふことは

小さいことのやうだけれど限りなくかなしいことです
ものごとろつきてよりこのかた

幾度こんな哀しい思をしたか知れない私です

詫びてもわびても わびきれない過失の爲に

その一筋のはげしい悔の心もて

生きの身を断たうとしたことさへあつたのです。

悔ひ嘆きてもかへらないことに

身も心も奪はれる愚さは知つてゐるけれど

神よ！人類よ！ 血塗られてゆく歴史の汚點は

何時 何によりて拭ひ淨めらるべきか

元の色にかへらないテールを拭ひ 拭ひつゝ

吹き荒ぶ沙漠の風と共に哭きたい日です。

一九四四、三月の日記帖より

生活断章

―雪と影とわたまり―

片井溪巖子

x
あかつきの雪をふみゆく、
ひとりの雪の音して
深い雪へ みちつけ。

x
新らしい仕事も

雪に重たい泥靴で、

あさから晩まで咳する。

x
三十分足らずの晝飯を

冬陽の壁にくつついて、

砂を噛むよなサンドウィッチを

x
いっばいの水呑んでがまん。

けふもおやみなく雪は
ふったり こけたり、
ぬかるみを運ぶセメント
満身に汗する二月二十日。

x
満目かれつくしたる

風景の底を流るる、

憂鬱な ジョルダンリバー

晝夜をおかす逝く、

x
この兩岸の倒さの影。

x
わづかの金をポケットに、

くるる吹雪の中いそぐ。

x
一仙を五仙を惜む心の

またしても意外な空費

x
こんな私の長い生活食料。

まつ裸になつた同胞が
早く／＼ 柵から出よと、
さいそくさるる理不盡
そこには この雪の日にも、
何かと探してゐる雀等が
飛廻る注意ぶかい足跡。

x
ビルデングの折れた影と、
影雪のその空地からも
はや下萌ゆるソートレーキシター。

x
ぐるりは雪山、
いつまた逢へるともない。

x
雪夜の枝を描きたる
その月は 天心。

x
明り過ぎる月夜の窓に寝返る。

生

野長瀬正夫

一年に一度ぐらい電話をかけてきた
り、

二年目か三年目に

ひよいと葉書を呉れたりする友達が
ある

用事かと思ふと用事でもない

人生の味はひの深さを

僕は時折かんがへてみる。

―註釋―

此の詩は、最近赤十字船によつて、日本
から此處の日本語図書館に届けられた書籍
の中の二冊、詩集「熊野濱歌」から抜萃したもの。
平明な言葉を用ひて、すつきりと水彩畫の如き
表現、しかも深みのある詩が多くて讀心持の
良い本であつた。一般同好者の御一讀をすゝめる。

水温む頃 鶺鴒子

薄着の肌にふれる春のけはい――
裸木もボツリボツリと目をさます。

芽ぐむポプラの小枝には

おしやべりの小鳥が二三羽

春をむかへた歡びに

すつかり有頂天になってゐます。

灰色の土の中から

甦つた雑草は

春の精氣を吸ひながら

戦も――

苦惱も――

不満もなく――

すく／＼と伸びてゆくのです。

短詩二章 野田貴一

雨漏の夜

ボツリ ポタリ――

天井を打つ雨漏の音

醒めた私は ふつと過去を憶出す

あゝ ほんとうに――

叔父様の亡くなつたのも

こんな雨漏の音のする夜でした。

光

何處を探したらよいのか

たつた一つのこの身の置場

神さま 佛さま――

たつたひとすじのみ光に

合掌する私です。

ヒルクリストにて、

畠律能句

如月日記

木内春波

水仙の芽青々と霜よけをとる日和

陽當り論じてゐる土を割ったキヤスタービズの双葉

ポプラ芽吹くに定めなき運命の袖を別ち

お別れの柵のうちそとで月が照してゐる

児供等の戦争ごつこも時雨でメスの鐘鳴る

しぐれて甞れて夕日だけの青空に暮れる

ひえびえとにはとりを聞く枕時計のあやみ

酔つたら駄目な男で又酔つた小春日

こと足りて此の朝あさがほの種を下す

赤々と夕焼雲よ 猫の死骸を葬る

いさかひを止めて一人出て来た堀割の月影

しみじみと轉住を考へる夜更の風音。

ポピイの會

二月句抄

片井溪巖子

午後からは雪の霽するばかり常盤木。

冬陽いっぱい餌あさる聲はめんどりおんどり。

松野寶樹

石鹼の泡立てゝゐる顔へ沿岸開放の話聞かせてゐる。

キヤンプ冬ざれの枯木に雀ら鳴いていやがら。

大月喜三郎

先の判らないことで冬木のうら枯れてゐる。

うちの娘勤めにゆく葱の青さにおく霜。

細梅さよ子

日が伸びてくる早春靜な針に糸とをす。

牛が鼻なめる水に枯れた景色で。

田原紅人

枯れ枝にあふれてゐる風の雀。

晝月たかく幼稚園の歌きいてゐる。

古 稀

着古るしきふるしたコートと年とつた。

子の入營

送つて戻つて香々ぽり／＼嚙む涙が。

冬、雑木デルタまで出ると汽車の煙。

次男も入營す

見送つたあとのさびしい咳する。

塩澤徹四郎

今朝から看護助手となる白いガウンのひもを結び。

ベッドは冬陽静な美しい人の病める。

米倉久枝

置き去り征きし干物ほしてゐる小春日。

生きる犬にももの足りてキャンプの元日。

米倉林泉

流るる水に我が生活をまかす。

森本彌山

雀雀と鳴いて早春午后の陽がまぶしく。

林百尺樹

中村夕佳里

高木好文

からっ風にバンダナしめなほしてゐる。
存分にいただいて夜のせまい道はば。

中川しま子

あきらめた生活にもあき仰ぐ空の汽車の煙。

午砲時計に合はす壁のよごれ。

松野南龍

猫柳少し芽ぐみ溝の水見え。

雪の中歩ゆみくる男の下駄。

府川真砂夫

病人も看護婦と明るく虹のひと時。

よまいごと脊に聞いて春日のペンタ塗りひろむ。

武井古流星

仔牛仔牛とやうやう出る聲出しとる。

並木の霜の華落ちる午のサイレン。

森田餘子犬

何もかも思ひやうですよくつまるストーブです。

干し並べたるひとまあかんぼうは寝とる。

俳句
春雜詠三人抄

ハートマウンテン 藤岡無隠

松柏の深雪ふまゑて立つを見よ
少年等しまきの道をたゆらはじ
月冴えて四方の陣營事關乎たり
童ンベ等小さき橈曳きむつまじく
スクリンに霧氷ちりばめ美しく
山の湖の底ひ知れずよ氷面鏡
前線の最後のたより寒燈下
雪深し蹣跚として往き来^き人
涅槃會や大悲山下の佛子達
春立つや靈に供ふる紫^{バイアルハート}心章
掃きすゝむ簾に春雪こころよく
雪解道交々先をゆづりけり

指呼の山白衣新らたに冴えかへる
バラックのあるじは誰ぞ離まつる

祝松井秋水君息女誕生

長じなば春の祭のクヰンとも

ポストン 関五松

隣にも又隣にもスヰートピー

日毎摘む病後の妻やスヰートピー

養雞は白一色の春日かな

雞も小雀も居て暖かし

釣り上げしポーチ懸りぬ芽柳に

トパス 島本巽村

この三年花見ぬことも戦中へ

うららかや外出の一日得て愉し

春曉や語相手もある厠

春曉やぼやけそめたる水溜の灯

朧夜の似たるバラックや戸にまどか

ポストン
文藝

歌壇

永瀬

勇選

如月歌會詠草集

順序不同

友等まねきここに別れのふるまひす
あこ吾子の入營も今宵となれば
再びを召されていゆく吾子と言へば又逢ふ日まですこやかにあれ
和歌の道學ばまほしく思へども日々たつきの家業にいとまなき身は
ネブラスカ 赤星さと

升谷 千代

冬日ゆぐ湿く差入る空へやの静かにて病み伏す我の心へ和あり。

朝光の差しくるなべに輝きて雪かとまがふ屋根の大霜。

昂たかぶりて言はむとすれば我が胸の早鐘の如高鳴りおぼ覺ゆ。

砂ほこり捲き上げてゆく春風の吹きまにまに花は開くらし。

赤松傳代

雨ふりて青き葱の芽萌え出でぬ久しく待ちし此の芽なりしよ。

みまかりし夫をしたひて幼な子のまた泣くきけは吾れ堪へがたし。

生を受けし國に生命は捧げむと子は宣誓の式に臨みぬ。

児玉なを

雲雀子の啼く音さやけし枯原のいくま青き麥畑の上に。

くし梳るわが黒髪や惜しめども黒きがまゝに薄くなりぬる。

東京より移轉せしとふ老い母の消息ぞ見つついひがてなくに。

春の雨しましふりたる宵を温う空には匂ふ二日月の影。

シカゴ市矢形溪山

壹萬を越ゆるシカゴの同胞に唯一人だに訪ふに友なし。

めぐり来む春は徒らに遠くして公園の社殿はいたく廢れたり。

かしましく機の一群がゆきてより庭は黄昏のとばり迫り来。

相離り疎くなりぬと思ひつつアルバムに見入る宵の一と時を。

貴家 志ま子

嵐たち鳴り凄まじくみしみしと室に響くは胸さわがしも。

屋根飛びし暴風の記憶よみがへり今日吹く時化に心をのくも。

人のいのちあまた屠るを譽れとぞ誇り戦ふ恐ろしの世や。

千人針吾れに乞ふとし来し友のまなこうるみて言葉少し。

易の子故あるべきこととは知りつつも召さると言へばなほ淋しかり。
怯えつつも加州に歸る日を繰りて子等と語れば夜の賑はしき。

クリスタル市 川 原 八 重

吹く風はいまだ寒けれ木々の芽の角ぐむ見れば春ちかみかも。

サンタフェの友を思ふ三首

今もなほ山の配所に明け暮を送るあまたの友を思ふも。

小松原へだてそびゆるロツキーの高嶺や今日も雪のふるらむ。

ロツキーの峯吹きをろす小夜嵐君が療舎は心して吹け。

デンバー市 安 井 静 女

世を忘れ身をも忘れて今日一と日友に睦みつたのしかりける。

久に見る孫愛らしくなみだしぬ其のさかしさを夫に見せたし。

自由にてありけるときは思はざりきとらはれて知りぬ自由のたうときを。

鈴 木 緑 松

入營を送る喇叭のひびく場^{には}にかすかに起る教^を泣くこゑ。

送る人征く人ともに泣きぬれて月夜の庭に離れがたくをり。

征く父の胸にすがりてひたすらに別れを惜しむ幼な子を見つ。

征く人の自動車^{くるま}の窓に寄りすがり離れがたくすはその妻にかも。

大園晴子

看護婦を志望して吾娘出所す。

看護婦の業^{わざ}を學ぶと吾娘ここに志たてて出でゆかむとす。
をみなごにふさはしき業^{わざ}と思へども娘は耐えうるや三年^{みとし}の苦學に。
笑み交はし出所^{いっで}行く人の群中に一人泣きつつゆきし吾娘はも。
今日までを育て来し娘に別れては思ひ多くして一と夜ぬらえず。

永瀬正臣

子供等の風あがりをる濃みどりの空に白雲かゞよひわたる。
道の邊の焚火によりて遠近^{をうちう}に朝餉の鐘の鳴るを聞きをり。
見はるかす巖山の上の棚雲の赭くにほへるは出る日近みかも。
海をわたり戦争^{いくさ}に出づる兵士^{つはもの}が妻に逢へるを見つつ哀^{かな}しも。

北林静江

この國を敵とは思へど愛し子のいのち捧ぐる國と思へば。
やうやくに住みなごみたる今にして收容所開鎖の報は悲しも。
收容所開鎖は近しこの日頃もつみし友と又別れむか。
轉住して主なき家の花園に友がめでにし花盛りなり。

大 空 魁

朝明けの牧場^{はう}のかぎりに雪白くつもりてあはれ牛群^{うし}のかげもなし。
雪の牧場はてなかりけり木柵^{さく}のみが線路に沿ひて黙々と見ゆ。
四方や来し汽車入り混みて構内に乗換へを待つ人群らがれり。
(平原をゆく)

内 堀 三太郎

うす黒きキャンプの軒に冬陽てり香りかそけく花ピ一の咲く。
さし木せし軒の白楊枝しがりうす緑なす若葉陽には中。
心なくも住みしキャンプのかそけさに人聲を真似^{まね}つ歌詠み遊ぶ。

望 月 みどり

いつはりと妬みと呪詛^{しもと}の咎^{とが}なりをみなひとりが行く道やこれ。
理不盡の咎とは知れをみな吾れ命死すとももだして受けむ。
女、女をみなひとりの行く道はかくもわびしく悲しきものか。

永 瀬 勇

野づかさののぼれば炭か焼く煙しちくなづさふ冬木原の上に。
霜乾き庭あたたかし遠々に翼^て光りつつ白鷺^{さぎ}あたる見ゆ。

菜の花に飛ぶ蜂見つつあうる身の思ひは深し比島戦の上に。

吾が知れる幾つかの名も眼につきて戦傷の記事は胸塞がしむ。
(二世兵の戦傷を)

後記

暑からず寒からず ポストンの氣候も今が絶好の時かと思ふ。最近山登りして来たと言ふ人の話に 山ではもう名も知らない沙漠特有の草花が澤山に美しく咲き乱れてゐるさうで 聞くさへに自づから登山に心をそゝられる思ひである。全く春が来たのだ。其の暖かい今日午後 吾々短歌會は例の如く月次歌會を廿七・七Aで催ふした。今回は特に猿渡氏御令息の御好意により歌友一同の寫真を撮影して下さると言ふ事で 集まつた歌友達も今までにない大多數で廿名からの盛會さであつた。斯様に都合すれば誰も皆出られない事はないのであるから 唯寫真を撮ると云ふ時だけに止まらず 今後は歌會のみの折りも精出して出席されたいものである。勿論是れは短歌に興味を持ち其れの研究をして見たいと思ふ熱意のある人のみに言ふ言葉であつて 實名的に短歌を發表しやうとする人には勧めぬことである。尚ほ今日は歌友牟田靜子氏の加州歸還をお送りする意味に於て歌會後簡單な送別會をも催ふした。既に二月朔日。文の後記にも言った如く 轉住所生活も長くて今年一杯位のものでいづれ皆又思ひ思ひにちりぢりになつて仕舞はねばならぬ事であらう。誠に寂しい思ひである。其の先發者の一人として吾々歌友の中から牟田氏

を送る事は更に寂しい限りである。併し之れは各自の環境によつて皆異にするのであるから何うすることも出来ない。唯愚生の希望する處は今後所外に出られた後も短歌を詠み續けるだけの熱意と餘裕とを持つて頂き度いことで、其れによつて歌友達とのフレンドシップを末ながく保たれんことである。終りに竿田静子氏御一家の上に、安全と御健康とを祈念しつゝ此のペンを擱く次第である。 二、二四 夜半記ス。

窪田空穂先生の長歌一首

友に 寄す

文藝の名に隠れて、貴族趣味にあこがるる人よ。

我は思ふ 文藝とは貴族の心を持ちて、

平民の道を行ふものなりと。正直に、率直に、

有りを有りとし、無きを無きとし、入用を拾ひ、

不用を捨て、平易なる言葉をもて語るべきなりと。

此の心人に好まるとは壓はるるとは問ふ所にあらず、

我はただかく信じ、かく行ひ、足らざるをこそ恥づれ

いまだ疑ふ事を知らず。

選歌隨錄

此の欄では何時も諸君の貴い作品に對して、自分の足らはざる事も顧ず今日まで随分と悪口ばかりを吐いて來た。嚙不満を感じて居られる方も相當にある事であらう。其處で今回は少し趣きを変へて私の佳いと思つた作に對して聊か愚見を述べて見やうと思ふ。

昂^{たかぶ}りて言はむとすれば我が胸の早鐘の如高鳴る覺ゆ。

或る日の作者に、意見の衝突か又は其の意に従はぬ事があつた。其の時の心持ちを反省されて成つたのが此の作である。斯うした事は吾々の身邊には常に屢々起り、且つ消え去つて行つてるのであるが大方の人は皆無反省に過ごしてゐるらしい。其處に取材された作者の敏感性と、其の歌に對する熱意とを見るべきであらう。句法も初句に對し四五句の照應は誠に適切で一分の隙もないところ結構な作だと思つた。

雲雀子の啼く音さやけし枯原のひとくま青き夢細の上に。

右の作、内容表現ともに別に特殊性のあるものではないが、流石に手馴れた詠振りで一讀明らかに初春の情景を眼前に髣髴たらしめるものがあり、清鮮の感を抱かすと思ふ。句法も二句目で切り此處に小休止を置

いた處、作の上全体に餘韻をもたせ、好感のもてる一首だと思ふ。
人の生命あまた屠るを譽れとぞ誇り戦ふ恐ろしの世や。

歌意は今更説明を要するまでもなく、現在の大闘争の上に取次されたもので一讀忽ち讀者の胸を打つものがあると思ふ。全く現在の此の大闘争は近代化學の粹を集めての一大殲滅戰であつて人類史上未だ曾て経験した事のない凄慘極まるものである。この闘いにあつては平和の時には夢にも思はなかつた人を殺すと云ふ事が目的であり譽れとされ、然も一人でも多く殺す事が誇りとされるのである。其の矛盾した人間の心理状態を作者はつくづくと顧られて其處から發せられた感動がこの作をなしたのである。結句の世やのやは疑問詞であるが此の場合には感嘆詞の役を成すもので、此の一語によつて作全体の格調が整へられ尚餘韻として泌みじみと迫るものがあると思ふ。

朝明けの牧場のかぎりに雪白くつもりてあはれ牛群のかげもなし。

雪の牧場はてなかりけり木柵のみが線路に沿ひて點々と見ゆ。

作者東行途上、車中に於ての作で一見他奇の無い物に見えるが、旅を行きつつある者作を胸に持つて觀照する時、泌みじみとした寂しみが作の上に無言の中ににじみ出てゐるのに氣づくであらう。其處を私は採り度いと思ふ。

永瀬 勇



満座那吟社句抄

安田北湖

高原の薄月明り猫の戀。

鳩小舎の裏の鶏舎や春の泥。

掘り捨てしまゝの根株や地蟲出づ。

枯茨の雨や雉子の二三聲。

花茨の叢より叢へ子連れ雉子。

望月奇風

早春やぬかるみ道のいつまでも。

古株の土を開きて出でし蟲。

衝立を倒しにげたり猫の夫。

通り雨過ぎし舗道や冬の月。

穴出で、蛇日溜りに暫しほど。

山田天民

春風や口笛吹きつ庭掃途。

杖振つて吟じゆく人春の風。

早春やセラの御空は紅にそみ。

蟻穴を出で、休みぬ林檎の根。

曳きなやむオイル車や春の泥。

木村白嶺

穴出でし地虫へ早も鳥蠅と。

ミツキーマウス描かれし庭や地虫出づ。

收容所つゝみし闇や猫の戀。

早春やホプラに生りし鳥の群。

征きし子を思ひよる窓冬の月。

上村若舟

穴を出し蟻や老樹に登りそむ。

縄飛の娘に早春の一と日射。

早春や野に出で子等と鬼追ふ。

散らばれる子等のブーツや春の海。

早春や青みそめたる牧の木々。

土屋天眠

穴を出て暫しためらふ大蜥蜴。
三四匹暗に野猫の浮かれをり。
碁の客の又も長座や暖爐もや。
青空に流るゝ星や鐘凍る。
牛の糞からび残りし枯野かな。

山口牧村

セラ嵐風ぎたる夜半や猫の戀。
早春や母娘連れなる旅仕度。
壁の匂を賞でつ暖爐を圍みけり。
ストーヴや仕切りし部屋のワーマップ。
颯爽と坂来る人や冬の月。

村上聖山

雪解や堅き扉の百姓家。
春泥に吸はるゝ雨の小糸かな。
増築の校舎の壁や春の泥。
春泥や道の下行く貨物汽車。
春泥を刎ねて大電到りけり。

山田耕人

よち歩む子やニ三人春の風。
春風や乳児の何やら口づさむ。
蛇穴を出づや出所のそこかしこ。
蛇穴を出づれど我等なほ柵に。

山崎玻璃女

琵琶をきく静女の庵や春浅し。
早春や軍服着けて吾子歸る。
初孫を得し早春の我家かな。

永井翠敏

バラツクの高き床下猫の戀。
啓蟄の庭をへだてゝ話かな。
踏み込んでマゝ呼ばひをり春の泥。
水口へ古板道や春の泥。
春浅し両手ポケットにてくくと。

ポストン 山柳

初歩添削講座

島原潮風

課題「数」△原句○添削句

安井静女

△かず／＼の試練に堪へてよく笑ひ

(笑ひ)では軽く見えるから物に動ぜぬ
人と言つた方がよい。

○かず／＼の試練に堪へて重く見え。

△一億の数の一人とカ瘤。

之でも宜敷いですが何だか文章めくから。

○カ瘤俺も一億人の数。

△よく産むと笑つて今は褒めてとり。

(とり)は徴集としてあるが此句では兵
にとられるより。

○よく産んだ又陸軍か褒めてくれ。
とした方がよい。

谷本晚香

△一世の人も白髪へ数を増し。

(二世の人も)一世の方と言つた方が尊敬
の言葉に聞える。白髪へ数を増したので
はない。白髪の数を増したのだから。

○一世の方も白髪の数を増し。

何回も言ふ如く助詞の十二字中 か・の・に
を・へ・と・の使用如何で句の生死に關す
るから心して使つて下さい。

△杖の数殖やして安い父の趣味。

杖は一本で充分であるのに其数を殖
やすとは一般には判らんから。

○杖の數殖やし嬉ぶ父の趣味。

△部落へ子等數だけ殖いて見い。

えは(部落へ子等の數だけ殖えて見え)であらう。殖えるのは子丈けで年頃は出所するとの意かと思ふそれなら。

○部落で殖えて行くのは子供丈け。

原句では、考へさす句で他の人には判らぬ様であるが、殖えて行くのは子供丈けなら、壯年は減ずると云ふ意味が可成解ると思ふ。然し減りと殖えると一句の中に詠むと狂句になるから十七字で短いから後は察して見ると解る。

井上二葉

△會計で金は數へど儘ならぬ。

會計は金を數へる役目だから、贅字は省く様勉むべし。

○會計も自由にならぬ紙幣カネの數。

原句の意味、損せんとせば此の位、然し

是でも報告川柳よりは出す。

△便り待つ征きし我子へ指を折る。

昨年七月蹄の「夢」の添削に書いた如く、終止段で切るのは文法上での事、川柳は成べく切字を使はぬ様、指を折る」と終止段にせず(折り)としたらよいが、此句ではあまりいかめしいから、

○子の便り毎日指折る留守の母。

△眺れば輝く星は數知れず。

此句は何だか意味がある様だが、どう云ふ意味か拙には解らん。輝く星は數あれど世界を平和にする星はない。と云ふ意味でせうか。兎に角(眺れば)と和歌でも詠む口調を止めて、「見上ぐれば輝く星は數知れず」と詠った方が川柳らしい。それでも下を附けんと解らんから卅一字で(見上ぐれば輝く星は數あれど平和に輝く星はない)としたらどうです。

○数知れぬ星も名稱皆んなあり。

関 五松

△何處迄も数で行きたいハマの音。

数多ければ早く出来るから、数で行きたいと云ふ意味か。それなら添削不要と思ふ。

△人数が減つて隣のメスの皿。

之は人数が減つたから皿の数も減つたのでせうから、

○隣メス数なくなつた皿の数。

△マーブルの数讀む聲は三ツ五ツ

之は漸く数を算へる兎の聲を聞いたのでせうから。

○片言で算むマーブルは三から五。

(或は一つ飛び)

沖かもめ

△マボ遊び勝を数へる子の笑顔。

マボは(マーブルの)とすべし。

△伸び盛り^{カラ}躰になるまでもう一つ。

(躰になるまでもう一つ)は幾つになる事か僕は知らない。多分七歳か? それとも十七八歳か? よく調べて見る。然し句主の意は何ヶ月そこくの乳児であつたがもう満一歳になつて、之から伸盛りの躰になるとでも云ふ意味ではないかと思ふ。

堀田瓢池

△年問へば赤い指先二つ折り。

二つ折りではあるまい、二つ出しでせう。

○問ふ年へ可愛い指を二つ出し。

△年問へばレデーだまつてニツト笑ひ。

○年きけばレデーだまつて只笑ひ。

△彼士また大詰め待てぬ数に入り。

○彼の勇士大詰め待てず数に入り。

△片や数かたや眞理で大勝負。

相撲の呼び聲のやうだから、

○太平洋数と眞理の大勝負。

鈴木緑松

△排日屋不平数々並べたて。

上か下を附けると短歌になる。

○数々の不平並べて排日家。

とでもしたら川柳らしい。

△一票の数を争ふ議長席。

(席)よりは椅子としたなら、議長の候補

に一票を争ふ事になるが、議長席では議長

の席に於て一票を争ふ様にとれる。一票が数

となるから(数)は必要はない。然しこれで

も報告川柳は免れない。

△人数に配る慰問の有難さ。

中七、座五丈けなら意味深に聞えるが、

初五の人数で壊してゐる。

○有難く人数に分ける慰問品。

之なら慰問品の有難さが判る。君の原句

では慰問品を配るのが有難い様にとれる。

兎に角課題の字を詠み込まうとするから

意味が違ふ様になる。それで題を内容に

詠み込む。即ち(数)を言はんで数になる様に詠む心掛けが肝要です。

△見えすいたお世辞数々速べる人。

之も報告に過ぎん。

○見えすいたお世辞も旨く数並べ。

としたら幾分か意味がありさうです。

△配給にキャンペの人の数をよみ。

之は當り前で意味がない。もう少し意

味のある句を詠んで欲しい。

△割前に子供の数を揃へて見。

之も報告で意味はない。

○割當のお菓子供子供は数へてみ。

とでもしたら子供の心理が幾分か判る。

之とても報告川柳より出ない。

◇川柳は實感を詠む事とは云へ、可成意

味が含んでないと所謂報告川柳となるか

ら、心して作句を願います。

毎月製本の日が一定しませんので、締

切が早い時と遅い時とあるので、添削句が毎月集りませんから今月は二回分の課題を載せて置きます。

『皺シロ』

締切 四月十五日

『髪ヒゲ』

締切 四月二十日

第五十八回川柳句會

課題「歸還」

難波桂馬選

前 板

思出を繰って帰還に迷ふ今。浪音

歸りたい加州の家へ夢で行き。同

歸還だと聞いて不安がまた一つ。峯月

適齡の息子歸還に悩む親。かもめ

平和への準備を急ぐ歸還兵。晚香

歸還兵矢張り平和を柵で待ち。同

歸還説前途不安が怱ばれる。天眠

歸還とは別に悠々日向ほこ。狂月

歸還令歸國と決めてからの腰。孫六

歸りたや結局迷ふ子澤山。孫六

歸還する覺悟を決めて踏む茨。竜耳

見誘のつかぬ歸還を躊躇する。軟葉

歸還して餘生を送る氣にもなり。松籟生

五 客

歸還説家が氣になる子澤山。速水白舟

沿岸へ歸還に迷ふ皮膚の色。沖本かもめ

環境が故國歸還の肚を極め。新屋軟葉

柵内に慣れて歸還へよどむ足。武智峯月

松葉杖歸還勇士に腫がうるみ。沖本かもめ

人 鈴木緑松

歸還する日を楽しみに嫁と母。

地 山内狂月

險惡な空氣の中に歸還令。

天 早川美貴子

歸還兵までに排日つきまとい。

軸

歸還説余所に今年も花の苗。

以上七十一句中廿句の嚴選

第二十九回川柳句會

課題「頭痛」

島原潮風選

天

早川美實子

寝不足の頭痛がたゝる事務机。

地

関 五松

くだびれた髪から覗く頭痛膏。

人

稻垣牧東

安注の明日へ頭痛の閉鎖令。

五 客

好きな釣頭痛忘れて赤蜻蛉。 稻垣秋月

今更に頭痛の種の市民権。 瀧川巴水

見通しのつかぬ時局へ増す頭痛。 星野光葉

倦怠期今日も頭痛へ逃げて居り。 稻垣牧東

物思ひ娘頭痛と眼をそらし。 同

佳

氣から出た頭痛を月へ立つて見る。 秋月

頭痛氣味夜更淋しく息子を偲び。 かもり

母親の頭痛一家が暗くなり。 瓢池

大家族頭痛の種は解除令。 狂月

再轉へ頭痛を起す人が出来。 白舟

母親の頭痛は果立つ子乳呑む子。 孫六

風邪氣味の頭痛がふつ飛ぶ釣の友。 同

環境へ頭痛で暮れる子の躰。 晩香

今更に頭痛に悩む閉鎖令。 同

頭痛なり十六弗へ娘の背丈。 竜耳

不愉快な話へ起きた宿醉。 同

協力へ進んで頭痛の朝を出す。 汀村

歸還説まだく頭痛の筋があり。 同

排斥家頭痛の種を持ちまわり。 静女

軸

頭痛膏少しよければ掃ひて居り。

次回課題

「意外」

締切四月十五日

「心配」

締切四月十五日

互選

席題「底力」

三月十一日句會

- 6 微動だも見せぬ祖國の底力。谷本晚香
4 底力知れぬ相手へ手をあまし。鈴木胡仙
4 底力あつて人種を見直され。山西里江
4 逆境を乗り切る妻の底力。島原潮風
3 底力日本男子と云ふ誇り。安元時子
3 大東亜心一つの底力。津村汀村
3 優勝のカップに見せた底力。稲垣牧東
3 信仰を得てそれから底力。稲垣秋月
3 底力ある正論へ聲を呑み。同
3 底力秘めて泰然待ち構へ。関 五松
3 國策に沿ふ産聲の底力。鈴木緑松
3 一丸になつて銃後の底力。島原潮風
2 底力見せた妙手に勝ち名乗り。稲垣牧東
2 國難へ一億民の底力。鈴木緑松
2 聖戦の意氣に燃え立つ底力。同

- 2 動乱はこれかうと云ふ底力。津村汀村
2 土俵際頑張る力士の底力。井上二葉
2 これからは己が力の見せどころ。山西里江
2 底力ある辯舌に座が緊り。鈴木胡仙
2 解決へ理窟を抜き底力。谷本晚香
1 底力どうして出たか火事の後。稲垣秋月
1 獨立の子に現れた底力。関 五松
1 長期戦耐える銃後の底力。鈴木緑松
1 泰然と孤島を護る底力。同
1 借金してから出て来る底力。島原潮風

互選

席題「腕」

三月十一日句會

- 7 瘦腕へ頼る一家の氣が緊り。鈴木胡仙
7 七轉び八起きの腕へ今日の地位。山西里江
6 轉住は西か東か腕を組み。津村汀村
5 腕立ての後を詠びて夫婦仲。稲垣牧東
5 歸還兵腕一本を幸に居り。稲垣秋月

- 5 こんな手もある日曜の腕枕。安本時子
 4 片腕を國に捧げて子は歸り。関 五松
 4 入墨の腕が指揮する罷業團。鈴木胡仙
 4 戦況に身の將來へ腕を組み。稲垣牧東
 4 腕節もまだく強い持つ希望津村汀村
 4 バラックに腕をさすつて年を越し。島原潮風
 3 暫くは腕も不用の貰ひ飯。谷本晚香
 3 自信ある競技へ腕は鳴つて居り。井上二葉
 3 守備兵は力の限り腕を見せ。鈴木緑松
 3 細腕の母は浮世に耐えて行く。同
 3 國策に沿ふ花嫁の腕力。安元時子
 3 頼母しい腕に一家は頼り切り。山西里江
 3 修養の日頃を見せう今日の生花。同
 3 再建へ自信の腕に安く住み。稲垣秋月
 3 腕丈けで押せぬ理窟へ折れて出る。同
 3 辛氣さの餘り二人の腕相撲。島原潮風
 3 片腕と頼みし我子は國の華。同
 2 どの腕も十六弗と定められ。谷本晚香

- 2 雄辯家語調乱れば腕を振り。井上二葉
 2 腕の所え見せた加州を振り返り。関 五松
 2 斬込へ腕に自信の志願兵。稲垣牧東
 2 細腕に銃後を護る老いた母。鈴木緑松
 2 腕自慢少し足りないお辨當。安元時子
 1 失腕の勇士淋し虫の聲。同
 1 ポストンで十六弗の腕を見せ。津村汀村
 1 経験の腕排弁へ鉋り勝ち。吉里竜耳
 1 腕利きと云はれる人の靴の裏。関 五松
 1 腕の刀痕昔を語る樂隱居。鈴木胡仙
- x x
- 次回互選席題
- 「咳(セキ)」 三句吐
 「虚勢(キヨセイ)」 三句吐
- 四月七日迄に私に届くやうお願申します。
- 次回句會は来る四月八日午後一時半
 場所は第十九區十三―Dに於て。



小品

街上の行水

酒井知己

大學時代の記憶を辿ると多くの興味ある又滑稽な出来事を想ひ起します。勿論學校生活は勉強するのが主ですが、時には學生々活に潤ひを與へる愉快な出来事もあるものです。その中で特に私の記憶に強く残つてゐるのは、私達が寄宿して居た家の支配人に水を浴せかけた事件のことです。

蹴球試合直後の事で見物人は歸りを急いで大層混合つて居ました。道路は自動車でぎつしりつまり交通巡查はその整理に汗だくになつて居ました。私達は二階の窓から此の混雜を眺めて居りました。突然一人のルームメイトが宿の支配人に水を浴せかけやうと云ふ素晴らしい名案を提議しました。そしてどうして支配人を疑はせずに私達の窓の下までおびき寄せるかと云ふ事に就いて協議を重ねました。そして終に最善の計畫が考案されたのでした。

も一人のルームメイトが「角の交通巡查が貴方に來て呉れるやうに言つてますよ」と支配人に告げに行つて居る間に、私達三人はそれ／＼バケツに水を満して窓べりに置いて犠牲者の來るのを待つてゐました。支配人は多分「巡查が階上のいたづらつ兎等が窓の下を通る自動車に水をかけるのを止めてくれる様に頼みたいんだらう。」とでも考へたのか急いで出て行きました。丁度支配人が私達の窓の下まで來た時、私達は三杯のバケツの水を皆ぶち明けてから見つか

らないうちに大急ぎで窓際を離れました。巡査はこれを見て身體を前に折った
り後に曲げたりして大笑ひをし始めました。そしてその大笑ひは「止れ」を喰
つて居た自動車が待ち兼ねてホーンを鳴らし始めるまで長いこと續いたのです。
此の家の中で起る凡ての面倒な出来事の原因が私達にあるといふ專らな評判
のあるのを知つて居る私達は、支配人が私達を疑つて此の室に飛び込んで来る
だらうと豫想して居ました。私達は各々自分の机に向つて坐りました。私はす
ぐに本を開いて、支配人が身體中から水をポタ／＼落し乍ら私達の室を襲つた
時には、前からずっとかろして勉強して居た様な風を裝つて居ました。私達は
三人ともさも驚いた様子をして支配人を見上げました。一人の友達ウィーデーは尋ねました。

「おやおやハルさんどうなすつたんです。溝の中にでも落つこちたんですか？」
「どうしたかと言ふことは諸君の方がよく知つて居るだらう。」

ハルさんは怒鳴りました。も一人の友達のブラツクは顔さへ上げ得ずに吹き
出してしまひました。ウィーデーと私とが順々に彼に加はりました。

私達の名前を一人一人呼び乍ら支配人は私達の机の傍に寄つて來ました。

「ブラツク！ ウィーデー！ トム！ 此の三人の無智ないたづらつ兎等奴、

待つてゐるがいい、その内にきつとこの仕返しはして見せるから。」

さう言ひ乍ら支配人は扉の方に向ひました。扉を開けて出かけた支配人はも
一度私の方に振り向き乍ら言ひました。

「ついでだがね！ トム君、君本を讀むのには逆さに持たないで眞直ぐに持
つて讀む方が讀みよいんだよ。」

品小

家鴨の生血

羽根政春

二月と云ふのに路傍の裸木はもう芽をふいて、キャスターの大きな濃緑の葉は目に沁むやうに艶々しく光つて居た。急いで歩くと額に汗はむやうな、ほかほか暖い冬のポストンの晝飯のタイムである。

私は時間に後れはすまいかと氣遣ひながら早脚に歩いてゐたが、私の遙か前を、左手についた杖にすがるやうにして右足を不自由げに引きづって歩いてゐる肥満した老人があつた。

道路は修繕中で砂利を入れてあり、大きな石ころがごろ／＼して居てとても歩き難くかつた。

「福田さんかな？」

私は後から追ひ付いて、老人のフェルト帽の下にはみ出した頭髪に大分白いのが混つて居るのを認めた時さう思つた。福田さんが私が勤めて居る事務所に話しに来られた翌日、全身不隨の不思議な病氣になられて入院された話を聞いた。お見舞も不義理して居て、其の後どうされたか忘れるともなく忘れて居たが、後姿では少し老人過ぎるけれどもとても福田さんによく似て居た。トラックが注意深く徐行して私達を追ひ越したがそれでも乾いた砂は濺々と埃を上げた。

老人は立ち止って横を向いた。濃青色のサンガラスを掛けて居て急には判定出来なかつたがよく見ると矢張り福田さんだつた。

「福田さんでしたね。」

私は聲を掛けた。

「……………」

福田さんは私の名を呼ばれたが舌が硬はったやうで明瞭でなかつた。

「御病氣と聞いて居ましたがまだ悪いんですか。」

私は不義理して居るのを濟まなく思ひながら訊ねた。

「エエ…… ツーフになつてね。」

不明瞭な發音だったが、中風になつたと言ふことだけは聴取れた。

中風が舌や唇まで不隨にさせるのを迂闊ながら私は初めて知つた。

病氣になる前日、事務所で際どい猥談を飛ばせて、咽喉佛を飛び出しさうにして大洪笑された福田さんだつたが、あの時とは別人のやうにめつきり老人

うしくなられて居た。

右半身が不自由らしく、右手はコートのポケットに突込んであつたが丁度ブラ下つて居るやうな恰好だつた。

「随分不自由ですね。」

「エ：エ……」

福田さんは返事はされるけれど、物を言ふのが面倒さうであつた。私はもう話かけなかつた。黙々として二人は肩をならべて歩いた。

私は歩きながら不圖脳味噌をコツンと叩くやうなものを感じた。家鴨の血！ 其の事が突然ひらめくやうに潜在意識から飛び出して來たのであつた。

もう十年も前の事だけれど、暑い日本夏の盛りの出来事であつた。

「山火事だッ。」

と叫びながら、大勢の人達が興奮し

て手に手に鋏やシヤベルを持って、白い煙の立つて居る裏山に走って行つた。私も皆に續いて走つたが、肥えて居るので息が續かなかつた。

人々に後れて漸く現場へ着いて見ると、炒りつく様な日ざしの下で一人の男が土埃と灰と汗にまみれて眞黒になつて半狂亂の様に、其處此處の枯草の上を這ふて居る火焰の上に砂をぶつ掛けて居た。

皆は一齊に鋏やシヤベルで火を叩いたり砂を掛けたりした。私も二三度シヤベルで砂を掬つて煙の立つて居る草の上に投げかけたが、急に陽の光がかがつて眼に映るんが、物が、ドンヨリ曇つて来るのを覺えた。

誰か、私を抱いて大聲に名を呼んで居るのに氣が付いた。

身體はぐつしより汗で濡れて居た。私の顔を覗きこんで居る人達の顔が次第にハツキリとして来た。

氣絶して居たのだつた。走いた私の母は心配して男の人に頼み水を運んでもらつて足の裏にかけて呉れたりした。

私が中風にかゝりはしまいかと母は其の時から心配し始めたのであつた。晩年になつて私を生んで呉れた母である。

「お前は肥つて居るから一度卒倒したら中風になる。中風になったら家鴨の生血をすゝりなさい。」

無學な母が孫の一人に書かせた私への手紙には決して斯う書いてあるのだつた。

「生き血とはどう言ふ意味だらう。」

と尋ねると冗談好きの友人が、

「そりや君生きてる家鴨の首を千ヨン切つて、それがまだ跳ね返して居る

中に血のふき出る首をくわえてゴクゴクと其の血を飲む事だよ。」

と私をおどした。

無學な母の迷信だらうけれども私は中風になる心配を起す度に家鴨の生血の事を思つては安心する癖が何日とはなしについて来た。その血の飲み方も冗談好きの友人のおどかしとは知りながらも矢張り家鴨の首をくわえてふき出る血液をゴク／＼飲むのだと決めて居る。

サリナス收容所から此處ポストンに入所した當時の暑さと言つたらとても生きて再び出られさうには思へなかつた。メスや便所へは濡れ手拭を頭から被つて行つた。室に戻ればバケツに水を入れて足を浸してヂツとしてゐた。メスに傷く人達を見て人間がこれ程汗を出す事の出来る動物だと云ふ事を始めて知つた。

暑さに弱いから私は、山火事の事と氣絶の事と家鴨の事ばかり思つて暑熱と闘つて居た。

或日毎田さんが私に逢はせるとて一人の青年を連れて来られた。

「デイキ西本と言ふ私の友人ですがね。」

毎田さんの義弟で私が弟のやうにして来たのに、デイック西本といふ同性同名人が居た。其のせいめ、私は此の人に不思議な親しみを感じた。

「鬼に角私の處で傷いて下さいよ。」

ナアニ仕事と言つてもキヤンプの事ですからね、無理してまで傷いてる譯ぢやないですよ。暑いには暑いが皆凌いで居るんですから。」

瘦せて居るけれど西本さんは大きな力強い聲でグン／＼相手を押しつけるやうな話し方をされた。其の頃サブジ

ユグーシヨンの主任をして居られたが、
角田さんから私が遊んで居ると云ふ事
を聞かれて、就働をすゝめに來られた
のであつた。

「何しろ暑いですからね、もう少し遊
んで居やうと思ふんですよ。」

暑い／＼と言ひながら、皆それ／＼
仕事を取つて、今では遊んで居るのは、女
子供を除いては病人と私より外にはなかつ
たので、少しひけ目を感じながら言つた。

「そりや暑いですよ、併し暑いのは
誰も暑いんですから。」

西本さんは押し潰しに來るやうな調
子で言はれた。

「併し私は特別暑さに弱いんですから。
私が少し反撥的に言つたので、西本
さんはポツンと議論を止められた。」

「それでは今少し涼しくなつて伺ひ

ますから。」

西本さんと別れて、何だか拙かつた
なと思つたが、中風の事と家鴨の事と
を思つて仕方のない事だつたと云ふ風
に思ひ直したのであつた。

「……………」

福田さんが何か言はれたが、追想に耽
つて居たのではつきり聞き取れなかつた。

「えう？」

と聞き返すと、

「トーセーブ 仕事多いですか」

統政部は忙しいですかと最初言はれ
たのだから、私が聞き直したので、逆も
私に解るやうには言へないと思はれた
のか、「仕事多いですか」と言ひ易い言
葉で言ひ直されたのだと氣が付いた。

「え、ぼつ／＼やつて居ますよ。」

二人は又黙つて歩いた。

福田さんはポストン人事局華かなり
し頃、其の一局員として敏腕を誦はれ
た人だった。

毎田さんは行政長に、西本さんは部
落長監督になられて共にエバキユイー
リーダーとして、今をときめく存在に
なられた。私はお二人の推薦で、福田
さんが去られたずうと後の言はゞ後任
みたやうな事をやらせて貰つて居る。

福田さんはもう元の様な元氣な福田さ
んにはなれないのだらうか。別れ道迄来た。

「ぢや御用心なさいよ。」

私が福田さんと別れた時はもうメス
ホールから晝食を終つた人達がぞろぞ
ろ出て来て居た。

今も私は家鴨の生血の事を福田さん
にお話する機会を失つたまゝで居る。

Compliments
of

NATIONAL GROCERY CO.

MESA, ARIZ.

WHOLESALE - QUALITY GROCERS



木林

谷川江浦草

かうしてその年も静かに暮れ、シュバルツの森は又一面の銀世界にぬりこめられて行きました。

冬——雪に明け暮れるこの陰鬱な冬ごもりの生活にも、寒國の人ならでは知ることの出来ない楽しい團樂の一ときが赤々と燃へる爐邊に繰りひろげられるのでございます。殊に夕食後、香り高いカッフェを喫しながらラインの古城にまつはる数々の物語に夜の更けるのも忘れて語り興じたり、暗誦した名詩の朗讀あるひは又ピアノを奏でそれに合はせて民謡を歌つたりするときなど、それはそれは何とも云へない楽しさに浸されるのです。そんなやうなときヨシミはよくフサル先生の講義の真似をしては皆んなを笑はせました。

「そも／＼現象學フェノメノロギーとはア……オホン／＼」など、ヨシミは氣どつた身振りよろしく部屋の中を悠々と歩き廻るのです。すると母までが一緒になつて「フェメノン博士にお訊ねいたします。ノエマ・ノエシスとは一体どのやうなものでございますか。」など、學生氣どりでおどけたりするのです。

又ヨシミは興に乗るとよくピアノに向つてお得意のショパン作曲「幻想即興曲」を弾きました。それが又講釋だけでも大變で「右手のメロデーと左手の伴奏は和音的及律動的に従属關係にあり乍ら……」云々で存在と認識の函数關係をつき留めやうと云ふのですから中々大變なのです。え、ヨシミの腕ですって？・さあ私にはよくは分りませんけど、まあさうムラがあつたとは思ひませんわ。

さうかういたしてをります中に早や二月も残り少なになり、三月の柔らかな日ざしが日一日と春の訪れを告げて参りました。丁度その頃、フライブルクの街でアーベント（音樂會）が盛大に催されたことがございます。指揮者は世界有数のワインガルトナー氏で、ベートーヴェンの第九合唱交響曲が出されると云ふので大へんな人氣を呼びました。私もやつとのことで切符を二枚手に入れることが出来ましたのでヨシミを誘つて一緒に出かけました。ヨシミはその道すがら第九シンフォニーの解釋はフリードに止めをさすべきで、ワインガルトナーにはむしろシューベルトの未完成交響曲を指揮させたい。彼にしても自ら音樂家に訐された最も卓越せる靈感の一つだ”とさへ語つたこの第一樂章の方が遙かに感激を以て指揮が出来るのではないだらうか。など、言つて心なしか余り氣が進まないやうにも見受けられました。

でも、その夜のワインガルトナーの指揮は壓倒的でした。指揮棒一閃、粗野とも思へる強烈な全合奏が第一樂章を烈しく印象づけて行きます。やがてチェロ

とバスで奏されるトリオをもつスケルツォを以て第二樂章が華々しく飾られ、
息もつかせず第三樂章が続きます。こゝではアダージョ・モルトで宗教的感情に
富む崇高な樂曲が奏され、それから愈々終曲に入ると力強い管合奏とチェロ及び
バスを以て世俗的鬨争を経た歡喜が表出されます。そしてバリトン獨唱がシラ
ーの歡喜の頌を歌ひ始める。「噫、友よ、この調べにあらず、更に樂しき歡びに
満ちたる歌とや合はせん。」すると四部合唱がアンダンテで「相抱けよや億萬の
人々よ、遍く世界にこのひろき愛を與へよや……」と歌ひ和します。バリト
ンは更に讚美歌的リズムに従つて歌ひ進み、今や合唱や合奏に依つて段々と結
尾に近づく、そして曲は終に盛り上る様な崇高さの中に莊重に又力強く勝利の
歡びを以て終つて行きました。一瞬——息づまるやうな嚴肅さと感動とが澎湃
として場内に漲りました。やがてそれがくづれると嵐のやうな拍手が指揮者に
向つて湧きおこるのでした。私は感激に胸うたれながらソツとヨシミの方を向
きかけてフト奇異な感に打たれたのです。ヨシミは深々と椅子に身をうづめて
静かに嗚咽してゐるのです。感動？、いゝえ、私はその瞬間ヨシミの姿から感
動とは又全然違つたある感情の動きをとつさに受けとつたのです。私は慌てゝ
視線をそらしました。しかし？、失恋と聴覺喪失の人生苦悶を力強く戦ひ抜い
た勝利への道に歡喜の涙はあつても、悲しみの或は惱みの涙があり得やうか？
さう云へば近頃のヨシミの元氣なさはどうしたことであらう。今夜のアーベント

にしても余り氣が進まなかつた様にも思へるし……など、とつおいつ思案しつつ、今や交響曲には珍らしい第三樂章のアンコールも少しも耳に入らない有様でした。その中にふとあるものに突き當つてハツと息をのみました。若しかしたら……その時私の腦裏に一株の暗い影がサツとかすめました。若しかしたら、ヨシミは戦ひとるには余りに重い負擔に堪へかね、このシンフォニーの前に自分の無力を泣いてゐるのではなからうか……。すると——その主^{ライイト}導^{モテイル}動機は？ それは疑ふまでもなく私達の結婚問題でなくて何でありませう。

この問題については別に私達は改まつて話し合つたこともありませんでした。二人の間にはいっしか漠然とした氣持を通り越したある默契が次第に貌^{カウチ}をとりつゝあつたのでした。そして母も無言の中にこのことを認めてゐてくれました。でも、これは後でハッキリ分つたことなのですが、ヨシミはこの頃から尠なからず恩愛の板挟みになりつゝある事を私はうす／＼感づいてはゐたのです。恩愛の板挟み——何かの折りにヨシミが「本人の知らない花嫁さんが日本で出来つゝあるらしいよ。なほ人ごと見たいに笑つて話してはゐましたが、私はハツと胸をつかれつゝも恩人の世話だからと云つて結婚しなければならぬ」と云ふ事は一寸理解のつきかねることでもありましたので、漠たる不安の儘、その後忘れるともなく忘れてをりました。

この音樂會を境として私の不安は單なる不安では無くなり、愈々私たちの結

婚問題が日本の親類友人達の反對に依つて見事に暗礁に乗り上げてしまつた事がヨシミの口からハッキリ語られたのです。

その内に日本の方からお手紙が参りました、何でもヨシミの師事してゐた先生が最近兎角健康が勝れない爲氣の毒ではあるが、豫定の留學を少し早目に切り上げて一應歸國してはくれまいかと云つた様な文面でございました。ヨシミはよく冗談のやうに「グレッツチェン、僕はフランクフルトの東洋研究所へでも入つて一生この獨逸の森で暮らしたいやうな氣がするよ。」など、言つてゐましたが、この手紙を見ると急に「一應歸つて見る」と言ひ出して早速旅裝を整へ始めました。いざ出立と云ふ日の前の夕方、私はヨシミと連れだつてかずかずの想ひ出つきないあの森の中へ散歩に参りました。

どこかまだヒヤリとした早春の空氣はいづこからともなく漂ひ出るかぐはしい新芽の匂ひを運んでくるやうでした。私たちはたゞ黙つて小暗い森の木下道を落葉をふんで歩いて行きました。

「こゝでしたのねえ、私は静かに歩みを止めながらヨシミと始めて逢つた頃のことをつひ昨日今日のやうにさへ感じるのです。」あれからもう一年半にもなるのかなあ。」ヨシミも歩みを止めて呟くやうに申しました。そして私の両肩に静かに手をおき乍ら、「ねえグレッツチェン、學校の方の話が一先着いたら僕はきつともう一度このシュバルツの森に歸つてくるよ。一年或は二年、三年かゝるか

知れないが、僕には大學に對してどうしても果さなければならぬ徳義上の官費留學に對する責任があるのです。ね、それまで丈夫に暮らすんですよ。僕はまだ若いんだから……」。ヨシミは優しくいたわりを込めてやゝもすれば沈み勝ちな私に力をつけてくれるのでした。私だつて責務を重ずる獨逸の娘ですもの、こみ上げて来る淋しさをジツと堪へて黙つて領きました。

あくる日、ヨシミはワサル先生を始め澤山のお友達に見送られて、日本郵船の寄港地マルセーユに向つて出發して行きました。私も母や妹達とお見送りをしました。もうこれつきり二度と逢へないのではないかしらと不吉な豫感に何故とも知れず私の胸は悸くのでした。斯うしてヨシミがゐなくなつてからの私達の家庭はまるで火の消えたやうで妹達なども「ツマンないなあ」など、毎日悄氣てばかりをりました。それから二週間も経つた頃、無事乗船したから安心してくれと云ふ簡単な端書がマルセーユから参りました。そして暫らくして船中で投函された一通の手紙を手に入れました。

それは「愛するグレッチェンよ、私は今無聊に苦しむ長い／＼印度洋上の旅を續けてゐます。しかしあなたのことを思へば、私の心は喜びに満ち溢れるのです」と云つた様な書き出しで自分の今回の歸國は相當の決意の下になされたことで、自分は故國に於ける地位とか名譽とか云つた一切の因襲をかなぐり捨て、唯一個の人間として生きたいと願つてゐる、獨逸哲學の「充實性」に對する努力と

は言語の綾や語呂合せではない筈である、私はこれから本當に哲學するのだ、と云ふ力強い言葉が迷べられてありました。

ところが——それを最後としてプツリと便りがなくなつてしまつたのです。

どうなすつたのかしら、私は日夜思ひ惱んだ末とうとう一通の手紙を書き出しました。然し待てど暮らせど何の返事もないのです。そして又何ヶ月かの月日が流れました。ある日——え、さうでしたわ。もうラインの段々畑の葡萄が燦々と降る陽光の下につぶらな琥珀色の實をかゞやかしてゐた初秋の頃でした。一通の分厚い見慣れぬ手紙が日本から参つたのでございます。封を切つて讀み下して行く中に嗚呼それは思ひがけもないヨシミの病死を報ずる父君からの便りだつたのです。あの健康そのものであつたヨシミが假初めの病にて去つて逝かうとは……。噓だ！ 噓だ！ そんな事がどうしてあり得やう。でもヨシミが小康を得て書いた、今は悲しい絶筆となつてしまつた私宛の便りと同封されたヨシミの毛髪とはもう私に疑ふ余地をなくさしめてしまつたのです。ヨシミは死んでしまつた——私はヨシミの居間だつたあの二階の窓邊に倚つて遠く白光るラインの流れにジツト見入りました。

目にしみるやうな初秋の空——ヨシミが初めてこの丘の家を訪ねてくれた二年前のあの日も丁度こんなやうな日だつた。だがそのヨシミはもう死んだ。そしてもう二度とあの懐かしい姿をこゝに現はしてくれることはないのだ——グリーンと熱いものがこみ上げてくると、秋晴れのボージェーの山々が、そして銀蛇

の様に躍るラインの流れが次第／＼に私の視野の中からばやけて行くのでした。

え、どうしてこの南加の地にやつてくる様になつたのかと仰言るのですね？ お話すれば又大変長い話もございますけどごくかいつまんで申し上げます。獨逸を襲つた古今未曾有の經濟恐慌は此頃殆どその絶頂に達して居りまして、私達の頼つて居りました僅かばかりの土地の収益位ではもう生活を維持して行く事が困難でした。働くのだ！ 私は涙の中から立ち上がりました。そしてあの思ひ出の森の家を後に一家してマンハイム市に移つて行つたのでございます。私はそこで小さい時から好きだつた刺繡の仕事を得まして一家を支へるために根限り働いて働きぬきました。其後数年二人の妹達も幸ひ良縁を得まして、一人は紐育の貿易商に他の一人はフランスへ嫁いで行きました。母も安心したものは間もなく父のあとを追つてあの世に旅立ちました。私は其のまゝズット一九四〇年までマンハイムの街で刺繡の教授などをして暮らして居りましたが、妹達の再三再四の奨めに従つて／＼住みなれた獨逸を去つてこの米國の地にやつて参りました。妹夫婦は身心共に疲れ果てた私の爲にこの南加を安住の地として選んでくれました。今の私は日本を繋ぐこの太平洋の岸邊で靜かに一生を過ごして行きたいと、唯、そればかりを願つて居るのでございます。

長々とつまらないお話ばかり致しました。さあ／＼熱いお茶でも一つ召上れ。後でヨシミの好きだつたマーラーの歌曲「原光」でもおかけいたしませう。(完)

Shop at Sears & Save

IMMEDIATE SHIPMENT

シーヤスで買へば
節約します

シーヤス
ローバック
商会

メールで御注文
をお願い申します

SEARS ROEBUCK AND CO.

LOS ANGELES, CAL.

編輯後記

○ソートレーキ會議へ隨行と決定したのが二月九日、爾來その準備に忙殺されて雜誌編輯の暇がなかつたが、幸ひ初枝嬢が快く引受けてくれたので、安心して二月十四日各代表と共にホストンを出發、塩湖市に向つたのであつた。

會議は豫定よりは二日間延長して、各センター代表の熱烈なる討議が續けられ二十五日夜成勿裡に閉會、二十七日歸所してその翌日オフィスへ出頭、初枝嬢から「雜誌はもう印刷も殆んど済み、すぐ製本できます。」と聞いた時は實に嬉しかつた。

三月辨があつたやうに立派に出来上つたのは、實に初枝嬢の機まざる努力の賜物である事を茲に特筆しておきたい。○春雨に潤されて柳は青い芽を吹き出した。野に山に、はた川にと英氣を養ふ絶好の期節となつた。化石、珍石を求めて山に登るのもよいし、又、コロ



マル

昭

の味

昭和醬油醸造会社

アリゾナ州
グレンデール市

SHOWA SHOYU BREWING CO.
RT. 2, BOX 51, GLENDALE, ARIZ.

ラド河畔に葦を漁るのも面白いであらう。先日私は同行十三人で山に登り、「インデアン保護地」を眼下にして、自然の最も麗しい景物であるさまざまの草花と、清澄な山上の空気に心の塵を拂ひ落して、心ゆく迄獨り詩を吟じたり、石を拾うたりして一日を楽しんだ。

讀者諸氏よ！ 世界動向の刻々たる変化に心を奪はれる事なく、聽て訪づるべき散びの日を望見しつつ、断乎鐵石の信念を持して、動搖せず、只管英氣を養はうではないか。諸氏の登山を特にお勧めしたい。



品製大

大黒市 白味噌
US 亀 寶干麴
中 萬

寶干麴

結果百パーセント

ロバート・ブリマー街三五〇。
羅府醬油醸造会社

3500 LARIMAR ST., DENVER, COLO.

○春季生花展を見せて頂いた。身邊の木や花を以て、我々の心に美と落さきの雰_{フミ}氣を醸し出してくれる生花を私は讚美してゐる。川口先生を始め生徒の方々の御努力に敬意を表したい。

○二十四日の夕、第二館府國風會の溫習會に招待され、私は錦聲會の先輩諸氏と共に出席させて頂き、第二、第三、兩國風會會員諸氏の熱吟を拜聴し、愉快な一夜を過させて貰った。

○三月號の本誌に一段と光彩を添へて下さつた門脇画伯の雅筆は「松雲」であるので茲に紹介する。

○先月號は蟹江氏の厚意に依り、ポストン風景寫真を掲載する豫定であつたが、どうした譯か寫真版製作所から送つて来なかつたので、載せる事が出来なかつたと初枝嬢が残念がつてゐられたが、今月號は進藤氏の御盡力で、小坂氏の立派な寫真を頂戴した。それから、高橋愛次郎氏_{（愛次郎）}恒吉盛花氏_{（恒吉）}並び

に岸田治三郎氏_{（三郎）}より御寄附を頂きました。又、泊良孝氏_{（良孝）}より開戦以來の力作を集めた自選歌集「渦巻」を贈られた。以上の諸氏に厚く御禮申します。

○マンザナア訪問中の本協會理事長稲垣牧東氏より、皆様へ宜敷との御便りを頂きました。

○本協會短歌會員文空魁氏はシカゴに轉住されました。御健闘を祈ります。(N.M.)

ボストン
文藝
會社

第一卷
參九
仙二
第四卷
參月
仙五
外郵
（郵便費別）

編輯 松原信雄
同 有田百
同 島原潮風
同 重富初枝

印刷所 ポストン印刷所

發行所 ポストン文藝協會
(統政部内)

POSTON POETRY CLUB,
UNITICITY HALL,
POSTON, ARIZ.

Vol. 3, no. 3
Apr. 1945

POSTON
POSTER

